



日本宣教ニュース

NO. 6 2015年10月

東京基督教大学
国際宣教センター
日本宣教リサーチ
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」（コロサイ1：6）

【巻頭言】

「宣教の神学から考える神学教育」

東京基督教大学助教 篠原 基章

2010年に、第三回ローザンヌ世界宣教会議がケープタウン（南アフリカ）で開催され、『ケープタウン決意表明』が採択されました。この文書において、神学教育と教会の宣教の使命との有機的な関係性について、次のように記されています。「地上における教会の使命（ミッション）は、神の使命（ミッション）に仕えることであり、神学教育の使命（ミッション）は教会の宣教（ミッション）を力づけ、教会の宣教（ミッション）と共に歩むことである」（『ケープタウン決意表明』、90頁）。

神学教育の使命は、教会の宣教の使命に仕えることであり、その宣教の使命と共に生きることにあります。ここに神学教育の独自性と立脚点があります。そうであるなら、教会の使命が宣教的であるように、神学教育もまた宣教的でなくてはならないでしょう。一般的な傾向として、伝統的な神学教育の射程は教会にあり（広くてもキリスト教界）、教会内の働きのための教育に限定されてきたように思います。しかし、神学教育の使命が教会の宣教の使命を力づけ、それに仕えるものであろうとするなら、神学教育の射程もまた同じ広さをもつ必要があります。

ローザンヌ運動の中心的指導者であったジョン・ストットは、教会の使命を「神がその民を世に遣わしてなさしめようとする全てを含む包括的な働き」とであると定義しています。宣教（ミッション）は神の宣教（ミッション）に参加する包括的な概念として理解することができます。宣教の民である教会は、イエス・キリストによってもたらされた神の国の福音を宣べ伝え、福音に生きる共同体を形成し、遣わされた地域において「世の光」、「地の塩」として生きるようにと召されています。神学教育は、このような包括的な教会の使命に仕えるために召されています。

東京基督教大学は、大学設立当初からこの包括的な教会の使命に仕える神学教育機関として、教会と社会の両方に仕える人材育成に取り組んできました。「日本宣教リサーチ」（JMR）の働きもまた教会の使命に仕える本大学の大切な研究機関の一つです。この研究機関がさらに発展し、広く日本の諸教会に用いられることを願っています。



【JMRレポート】

今回のJMRレポートとしては、「教会と地域福祉」フォーラム21 第4回シンポジュームの内容を、クリスチャントゥデイ誌のご厚意により、クリスチャントゥデイ誌に掲載された記事から一部引用させていただいて掲載いたします。

また、他宗教に関する情報を、今回も「中外日報」のオンライン情報から、一部抜粋して転載させていただきます。（記 柴田初男）

◆「教会と地域福祉」フォーラム21 第4回シンポジューム ◆

1. 日 時：2015年9月19日（土）10:30～16:00
2. 場 所：日本基督教団霊南坂教会
3. テーマ：「死生学と教会～より良く生きるために」
4. 参加者：68名

【主催・共催】キリスト新聞社主催、東京基督教大学共立基督教研究所共催

◇ 開催の趣旨を、稲垣久和東京基督教大学大学院教授は、次のように述べている。

- ・「ここに〇〇教会が立っているのはなぜなのか」、これは、今日の日本では重要な教会論（キリスト教コミュニティ論）のテーマであり、地域福祉の面から言えば、ソーシャル・ワークでも特にコミュニティ・ケアの問題である。
- ・超高齢化社会、しかも地域福祉も在宅支援が主流になってくる現代日本で、コミュニティ・ケアの中心は地域包括ケアになっている。家庭か、独居か、ホームか、いずれにせよ人が死、看取りを迎えるその場所を、病院、福祉施設、公的機関、家族、これらが協働して支えるための市民の心のより所、教会がそのようなスピリチュアル・ケア（パストラル・ケア）の中心となれるのか、なれないのか、新たな挑戦が始まっている。
- ・今回のフォーラムでは、「死生学と教会」をテーマに、死を見つめることで、自身の命や生き方を問い直し、より良い生を見いだす支援を教会やキリスト教の団体・施設がどのように行っていくのか、今後の宣教課題として共に考えたい。

◇【基調講演】 立教女学院短期大学学長の若林一美氏

- ・若林氏は、遺族や重い病を負った人たちと長年にわたって接してきた経験から、愛する人と死別した人たちにどう向き合っていくことができるのか、また信仰者として何を見るべきかを語った。
- ・1970年代半ばから、末期の状態にある人やその家族、遺族の話を書く活動をしてきた若林氏は、88年に「ちいさな風の会」を立ち上げた。当時の日本には、死別体験者のサポートグループなどはなく、若林氏はその道のパイオニアといえる。そこに集う人たちを通して、「悲しみは比べられるものではなく、その人の人生そのもの。同じような体験をしていても、悲しみは人それぞれ違うと思った」という。そして、自分のスケールで相手に向かって発する慰めの言葉は、決して慰めにはならないとも語った。
- ・また、英国の施設で亡くなったある老女が、「あなたは私を見ていない。もっとよく心を寄せて私のことを見てください」と、メモに書き残していたことを紹介した。若林氏は、『死をみる』というのとは、『死を看取る』ではなく、その人とどう共に生きるかということだと言う。「こういうことが、地域や教会の中で感性となって培われていくことが大事」と、教会のなすべき役割を伝えた。

◇【ゲスト登壇者】

・基調講演後、ゲストとして招かれた3人の講師が、各分野から次のように提言した。

- ① 早稲田大学名誉教授の木村利人氏は、死を知ることにより良く生きることであり、「死生学」が今を良く生きるための学問として展開されていることはとても大切だと語った。また、教会の可能性は、祈り、祈られることにより人が変わることだと言い、教会が祈りの共同体となって、それぞれが豊かに生きるために支え合うことができると話した。一方で、教会が地域のコミュニティーから遠い存在になってしまっていることが多く、在宅ホスピスなどを教会がどう支えていけるかという問題もあると指摘した。
- ② ルーテル学院大学学長の江藤直純氏は、「ちまたの実践死生学」として、東日本大震災の被災者に対する仏教者の姿から学んだことや、ノルウェーでの体験、また自身の父の死の体験から、死と向き合う人たちに教会が何をできるかについて話した。その中で江藤氏は、教会が積極的に葬式を引き受けていくことを提案した。日本社会では結婚式に教会が関わることが認知されており、それと同様に葬式にも教会が関わっていくことで、死へと向かい合いながらこの世の生を全うするプロセスに、牧師や教会が関わることが可能になるのではないかと話した。
- ③ 東京基督教大学助教の篠原基章氏は、教会のミッションと地域との関わりについて話した。篠原氏は、ミッションとは神によって派遣されることで、教会もその地域に神より遣わされている存在であり、教会の宣教の使命は、神に派遣された宣教の民としてこの世において神の国の福音を存在と言葉と奉仕において証することである。この派遣の神学は地域教会の神学的土台であり、教会はその使命に生きることで「真の教会」になると説明した。

神学者カール・バルトが指摘したように、教会は地域社会との関わりにおいて「屋根の上の小鳥」のようであってはならない。教会は地域社会から自己を隔離するのではなく、逆にその奥深くまで根を張っていくようにと召されている。教会は地域社会に遣わされているのであるから、傍観者としてではなく、地域社会に具体的に关わることで、教会は身体性と社会性をもつのである。

一般的に日本の教会における地域との関わりは伝道活動に限定されてきたように思われる。日本の教会は地域を伝道の場として捉えてきたが、それ以上の関わりを教会の積極的な使命として捉えてこなかったのではないだろうか。東日本大震災の出来事は教会の地域社会との関係性を見直すようにと迫っているように思う。

これからの日本宣教は、地域との関わりにおける教会の自己理解の刷新にかかっている。教会は地域に派遣された宣教の民としてのアイデンティティを回復する必要がある。地域社会との関わりにおいて教会の潜在能力を如何に発揮させていけるかが課題である。

宣教のビジョンは教えられるものではなく、捉えるものである（J・A・シェラー）。

◇【分科会】

・各講師による提言の後には、講師と一般の参加者によるグループ討議も行われ、そこでも「死」を通しての教会の役割や未来について多くの意見が交わされた。討議後のまとめでは、日本社会とキリスト教では、死の捉え方や、遺族との関わり方などに違いがあることが浮き彫りになった。一方で、教会がその地域で果たせる役割はまだ多くあるとし、今後の展望についての対話もできたことが報告された。

【文責：柴田 初男】

他宗教に関する新聞記事から 【2015年4月～2015年9月】

子どもをめぐる危機 現代の寺子屋で居場所作り

(2015年9月11日付 中外日報 社説)

人生で最も楽しい時期であるべきにもかかわらず、子どもたちが理不尽にも命を奪われたり、あるいは自ら命を絶ったりすることほど、痛ましいものはない。

最悪の結果を迎えた寝屋川の事件では、誰もいない未明の商店街を2人の中学生がさまよっている姿が防犯カメラに捉えられていた。事件に巻き込まれた背景に、家庭環境に問題があったと指摘するのは容易であろう。しかし、視点を変えれば、その場合でも一時的にしのげる避難場所はなかったのかという疑問が生じる。

子どもにとって安住の場である家庭が機能不全を来し、かといって勉強や集団生活の重圧、いじめなど学校にもつらくて通えない。逃げ場所や居場所をどこにも見いだせずに、子どもたちが行き場を失っているのが現状である。

8月下旬、鎌倉市図書館の女性司書が書き込んだ「学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしやい」というツイッターの投稿が話題になった。学校にも行けない、さりとて家にも居られない。それなら「図書館にどうぞ」というわけだ。図書館には利用者の秘密を守るという原則があり、子どもにとっての一時避難場所になり得る。

それならば、どの地域にも存在する寺院や教会などの宗教施設もまた、子どもたちの逃げ場所や居場所になってもよいのではないだろうか。場所的にもそうした空間は十分提供できるものだし、僧侶や教会長には守秘の義務もある。

実際に宗教者はすでに様々な動きを始めている。率先して地域の見守り活動をするだけでなく、お寺を開放して子どもたちの居場所づくりを進めたり、フードバンクを活用して貧困家庭へ食糧支援をするなど、現代の寺子屋の動きが見られる。また、教会で里子を受け入れる活動に積極的な新宗教教団もある。しかし、宗教界全体としては、これらはまだほんの一部の動きにすぎない。

血縁や地縁が機能しなくなり、無縁社会と呼ばれる現代日本において、寺院や教会がそうした居場所になるならば、宗教施設も大きな社会的存在意義を発揮できるはずだ。そこで、人は生きづらさから解放され、人間性を取り戻すこともできるだろう。

子どもたちにとっても、宗教施設がそのような居場所になれば、単に一時的な避難場所を与えるにとどまらず、自然な形で宗教的な情操教育も行われ、命を大切に作る心も芽生えてくると思う。その意味でも、現代の寺子屋が今後いっそう増えていくことを期待したい。

スピリチュアリティは伝統宗教を駆逐するのか

北海道大学大学院准教授 岡本亮輔氏

(2015年9月2日付 中外日報[論])

イベント化する宗教

パワースポット、御朱印集め、一之宮めぐり、仏像ブーム、著名人や歴史上の人物の墓めぐり、各地の祭りの観光化。伝統宗教の危機が語られる一方で、宗教が注目の的になったり、宗教と関わる場所に人が集まっている。2010年、神道の最高聖地である伊勢神宮は860万人の参拝者があった。仏教では今年2015年、高野山開創1200年を祝う大法会が行われた。4月の1カ月間だけで、予想を上回る20万人以上の参拝者が訪れている。

問題なのは、こうした伝統宗教の活況が日常的な宗教生活の再興にそれほど結びつかないことだ。秘仏などの御開帳や四国遍路といった巡礼は、宗教実践の中でも非日常性が高いものだ。そのため、観光や娯楽と結びつきやすい。現代でも、少なくない人が特別なイベントとして宗教に接している。

しかし、日常生活となると、ますます宗教の居場所はなくなっているように見える。若年層に限って言えば、墓参りや法事、初詣や七五三以外で寺社を訪れる人は少ないだろう。悩みや相談事がある時に宗教者の元へと赴く人となると、ほとんどいないのではないか。さらに言えば、仮に宗教者の所へ行ったとしても、僧侶や神職ではなく、占い師や霊能者だったりするのではないだろうか。

スピリチュアリティガイドされない宗教性

現代では、伝統的な教団や宗教者と無関係に宗教が受容・実践される局面が増えている。個々人が思い思いに宗教を消費する個人化が広がっている。スピリチュアリティは、そうした傾向を指す概念だ。

スピリチュアリティについては様々な定義が提出されてきたが、筆者は、伝統宗教との対比で理解している。一言で言えば、伝統的な教団に管理された方法で聖なるものにアクセスするのが宗教で、個々人が自発的に聖なるものにアプローチするのがスピリチュアリティだ。宗教もスピリチュアリティも、いずれの核心にも聖なるものがある。要するに、聖なるものへのアプローチが伝統的な仕方でもコントロールされているか否かの違いである。

そのように考えると、スピリチュアリティの興隆とは、誰もが聖なるものへ自己流でアクセスできるようになることだ。こうした状況は、伝統宗教の支配力が低下した先進社会では広くみられる。聖地巡礼の流行は、その帰結の一つと考えられる。宗教学者の星野英紀氏が指摘する通り、巡礼は、宗教者がほとんど介在しなくとも可能な宗教実践だ。巡礼とは聖地への移動に他ならない。その移動プロセスの宗教者のいないところで、自己実現したり、気づきを得たりしているのである。

伝統宗教にはあまり都合の良い状況だ。だが、こうした趨勢はこれからも続くだろう。何も宗教だけが、受容者の自発性に戸惑っているのではない。たとえば、テレビも同様だ。今の視聴者は、テレビ局側が見せたい時間に家族でテレビの前に陣取り、最初から最後まで視聴してくれない。基本的には録画しておいて、見たい時に見たい部分を見る。ネット上に違法にアップロードされた動画で済ませてしまう人もいる。面白そうなところだけをつまみ食いして、テレビ局側にとって最も肝心のコマーシャルは飛ばされてしまうのだ。

テレビでの喩えを続ければ、チャンネル自体が増加している。日本では、キー局を中心にした寡占状態が続いてきたが、今では海外のテレビ番組の視聴も容易だ。宗教の領域でも、チャンネルの選択肢の増加が見られる。伝統宗教の他にも、いくらでも宗教的なものが存在する。新

たに生まれる宗教もそうだろうし、疑似宗教的な運動もある。ネットでは、様々なワークショップやセミナーの情報が入手できる。

必要とされる仲介者

文化人類学者の門田岳久氏は「浅い宗教体験」という面白い議論を展開している（『巡礼ツーリズムの民族誌』森話社、2013年）。門田氏が調査したのは、佐渡島からバスで行く四国遍路ツアーだ。参加者には高齢者が多く、基本的には信仰熱心な人々だ。だが、門田氏によれば、彼らは巡礼を通じて宗教的に強度のある体験をするわけでもないし、それを求めているわけでもない。ツアー参加者が語るエピソードには、巡礼のお蔭で足が良くなった、亡父の幻を見た、先祖のことを思ったといったものが多い。巡礼のエピソードとしては、ありふれた体験ばかりなのである。

筆者が調査研究しているスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼や日本でのパワースポットめぐりでも、同様の現象が見られる。参加者たちは、誰もがするような出来事を巡礼で起きた大切な体験として語る。自然とのふれあいや他者との助け合いの重要性などだ。言ってしまうと、聖地巡礼をしなくとも、たとえばスポーツや農作業を通して得られるような体験なのである。

しかし、門田氏がこれらを「浅い」と表現するのは、深い本格的な宗教体験と対比して批判するためではない。そうではなくて、現代宗教は浅い体験しか提供できないような場所に位置づけられており、受容者も、そもそも深く強烈な体験を求めていないというのである。現代の人々はサプリのよう形で宗教を手軽に摂取し、それなりの気づきや洞察が得られれば十分なのである。

こうした状況は、伝統宗教に属す人々からすれば不満だろう。本来は、宗教は救済や生き方・死に方の根幹に関わるものだ。それらに結びつかない巡礼や寺社めぐりは娯楽であり、宗教のつまみ食いに過ぎないと。しかし、宗教のつまみ食いをやめさせ、伝統宗教の教義や儀礼を誰もがそのまま受容する状況に戻すのは難しい。テレビ視聴を力道山の時代に戻そうとするのと同じことだ。近代社会とは、個人の主体性や意思を尊重する社会だ。制度や組織の思惑に

参 考 記 事

◇ 指導者を描き続ける歴史小説家：

童門冬二さん(87)

奥深い宗祖、法然に降参

親鸞聖人や日蓮聖人ら鎌倉仏教の祖師、また政治家や財界人の生涯も手掛けてきた。人には様々な面があり、良い面を見るべきだと説く。

○ 多くの人物を取り上げてきました。

童門 歴史上の人物は円筒形をしているんですよ。360度どこからでも光を当てられて応えられる許容性を持っている。光を当てる側は同じ一人の人間でも、年齢を重ねたり立場が変わったり、その時々でアングルが変わる。それに応えるわけです。だから一つの見方だけで、その人を決め付けるわけにはいかないんです。それが顕著なのが織田信長と坂本龍馬。2人はいまだに分からない奥深さがあります。

それは空海さんも最澄さんも、宗祖と呼ばれる人にはいえることです。みんな深いし幅も広い。立体的でもあるから、卑小な力ではどうも太刀打ちできない。

法然さんの小説を書き始めましたが、途中でギブアップしてしまった。あまりの巨人ぶりに、小さなアリのような自分は降参したんです。生涯をたどるということで始めたけど、とてもじゃないけど駄目だなと思いましたね。

法然さんは偉くなればなるほど、自分の位置付けを低くされた。来る者は拒まずで、民衆の悩みを聞いておられる。谷底に座り、そこに滝が流れ込むわけですよ。滝のしぶきの一粒一粒が民衆の悩みです。滝は一本ではなく何本も流れ込んでくる。それに応えるだけの大きさ、深さがあった人です

○ 信仰するには至らなかった。

童門 僕は信仰の一步手前にいるんですよ。大変傲岸不遜だけれども、まだ自分の力を信じたい。人間の可能性を掘り起こして実験していきたいんです。僕の人生観は「起承転」。生きていうちに「結」はない。死ぬまで生命を完全燃焼させていきたいと思っています。

民衆の悩みに応える深い心

○ 日蓮聖人も書かれましたね。

抗して、自分自身で選択することが作法となっている。宗教だけがその作法をやめさせることはできないし、やめさせようとするれば、ますます宗教と一般社会の距離は広がるだろう。

とはいえ、筆者は、伝統宗教が残存する余地はもうないと言いたいのではない。むしろ逆だ。宗教のつまみ食いが広がったことで、伝統宗教の役割と責任はさらに大きくなったと考える。前述のように、イベントとしてであれ、浅いものであれ、聖なるものに接したいという欲求は引き続き存在する。だが、個々人が実践するスピリチュアリティは、専門家によってガイドされることがない。スピリチュアルな実践を通じて聖なるものに触れたとしても、それを統一された体系の中に位置づけたり、さらなる深みと強さを持った次元があることを知る術がないのである。

筆者は、ここに伝統宗教が現代で果たすべき重要な役割があると考える。繰り返しになるが、個々人が自己流で聖なるものにアクセスするスピリチュアリティに対して、伝統宗教は、聖なるものとの接し方の技法や、そこで得られた体験の解釈を長い歴史を通じて蓄積してきた。巡礼で得られた気づきや体験が俯瞰的に見た場合にどのような意味を持ち、さらにその先にいかなる体験があるかを示唆することができるはずである。

しかし、その場合も、伝統的な教義や実践を唯一真正なものとして大上段に振りかざすのでは、現代の人々には伝わりにくい。細分化し多様化した欲求に個別に応答しながら、スピリチュアリティを伝統宗教の世界へとつなげなければならない。伝統宗教と新興のスピリチュアリティの双方に通じた仲介者が求められていると思われる。そうした仲介者が現れることで、伝統宗教とスピリチュアリティは対立するものではなくなる。スピリチュアリティを入りに、伝統宗教へと触れるようになる場が生まれるはずである。



童門 僕がものを書く原点は、内村鑑三の『代表的日本人』です。西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹、それに宗教家の日蓮の5人が挙げられています。なぜ日蓮さんかとずっと疑問でした。内村さんはクリスチャンですよ。無教会主義。宗教者は、特に教える立場にある人は、大きい伽藍の中でやるべきじゃない。やっぱり辻説法、路傍に立って自分の信仰を伝えるべきだということです。その意味で日蓮さんなのでしょう。内村さんと日蓮さんで共通するのは辻説法という点です。当時鎌倉でスタートした宗教者はみんな辻説法している。それぞれ、ののしられたり石をぶつけられたり、他宗から非難も受ける。それに耐え、また反発もする。そうした、恐れずに自説を貫いていく姿勢。日蓮さんが、内村鑑三をして代表的日本人と言わしめたのは、モンゴル来襲を予言したとかいろいろあるだろうが、基本的には民衆と接する態度なんだと感じます。それは法然さんにも親鸞さんにもいえることでしょう。

鴨長明が『方丈記』を書いています。その半分は京都の災害史です。当時の大火や竜巻、飢えなど被災の状況が詳しく書かれています。今につながる仏教の宗祖たちは、災害を背景に出てきたといえるんです。

東日本大震災が起きた時、僕はふ抜けになったんです。以前は割合律儀な生活をしていましたが、昼まで寝ているとか、原稿の締め切りを延ばしてもらおうとか。酒も飲むが、飲んでも酔えない。何もできない、被災者への罪の意識がありました。

その時一番考えたのが、法然さんだったらどう対応するか。仏教は、津波を止めるとか一気に復興させるとか、そんな教えではないし、そんなことを人間は期待しちゃいけないと思うんです。あくまでも人間の努力によって、復興することが大事なんです。その時の心の支えとして、宗教があるわけです。

だけどあの時は、生き方そのものを問われている気がしました。おまえは今のままでいいのかと、誰かに問われているような。そんな時、テレビで避難所の体育館が映っていて、被災者がみんな明るいんですよ。その中心になっている子どもが、おばあちゃんに復興って何をすればいいのかって聞いたんだって。そしたら「自分に今できること

を続けていけば、それが復興っていうんじゃないの」と。すげえばあさんだなあと思ってね。

それでね、希望を持ったんですよ。被災地のことばかり考えていても役に立つわけじゃないんだから、今この仕事場で、手を抜かずに与えられた仕事を続けていく。二宮金次郎の言う積小為大という考えだなあと。おそらく、法然さんもおばあちゃんと同じことを答えたんじゃないかな。京都の難民たちが次々と押し寄せてきて、途方に暮れた一人一人に対して、今いる場所で南無阿弥陀仏と唱えなさいと言ったんじゃないかなと思ったんです。

○ 宗祖を見るとき視点の。

童門 いつも考えるのは宗祖と民衆との結び付き。民衆側のニーズにどう応えてきたのか、人々をどう救ってきたのかということが私にとっては重要です。生のやりとりに関心があります。時空を超えてさかのぼって、その時代の光景、民衆とのやりとりを復元したいんです。それは想像するしかないわけですが、伝記のようなものを基礎資料にして、時代背景から考えていきます。

得てして残されたものというのは美しい物語ですが、実際にはもっと生々しいことがあったはず。妨害とか石つぶてとか、そういうものを越えて、弥陀の本願を実現しなければいけないという使命感に燃えたときには、そんな目先の自分に加わる危害なんてものは問題にしない。高い理想を抱いて人々を救うわけですよ。

例えば親鸞さんも「歎異抄」で「弟子一人ももたずそうろう」とおっしゃった。ということは寺も持たないわけで、生涯を放浪の辻説法でいくよということです。実際に新潟から関東まで布教されたりして、それが蓮如さんの頃になると組織化されていく。宗祖も想定していなかった形になっているのかもしれないけれど、それぞれの時代で民衆の苦しみに応える僧侶の努力があるわけです。それは肯定すべきだと思います。

○ 小説を書くときに心掛けていることは。

童門 僕の人生観として、人のいいところを見るんです。欠点は見ません。人には必ずいいところがある。もちろん人間、誰でも内面に仏が住み鬼も一緒に住んでいます。現実には鬼が前に出てくることが多い。でも欠点があるから駄目だとは絶対に言わない。

都庁に勤めていた時、人間を三つに分けていました。言わなくても分かる人、言えばすぐ分かる人、いくら言っても分からない人。言っても分からない人は、異動させましたよ。でも今になって思えば、そういう人もいい点を持っていたんだよね。飛ばされた人は納得できないことも多々あったと思います。

飛ばした人が夜ごと心に浮かんで来ては、自己嫌悪と反省で七転八倒していますよ。まだ何かにおすがりしていないのは、極楽も地獄もこの世にあるっていう感の方が強いからですね。信仰する資格がないと思っています。

○ 人を引き付ける話とは。

童門 学校の先生が同じ良い話をして、A 先生の話は生徒がよく聞き、B 先生の時は騒ぎだす。その違いは、聞き手に対する愛情。B 先生はどういう話法で語れば相手に伝わるかという努力をしていない。A 先生は努力したという意識はないかもしれないけれども、自然と相手に分かってもらいたいという愛が伝わっている。

それは論語でいう「恕」です。常に相手の立場に立ってものを考えようとするやさしきと思ひやりのこと。お坊さんでも大事なものは恕で、信者のことを思って、これは伝えたいというパッションを持つことが必要です。

それと、人から「(この人) なら」と言われるような人格的な「らしさ」を、生涯かかってつくっていかねばならない。このお坊さんなら、おっしゃることは必ずためになると、聞き手側がそういう気持ちになるような人格を構築していくことが生涯学習だと思う。政治でも経済でも職場の上司にしたって、あらゆる指導者は「なら」と言われる「らしさ」をつくっていかないとけない。

特にお医者さん、学校の先生、そして宗教者。聖職といわれる仕事をしている方々には、聖の意識を捨てないでほしい。日常の行いそのものが、人々の模範とならないといけないと思います。

○ 宗教指導者に求めることは。

童門 宗教には純粹次元に立ってほしいという気がします。政治とは関わってほしくないですね。宗教は、政治という権謀術数を巡らすような反道徳的な世界から脱しようというところがスタートじゃなかったかと思うんです。人間の持っている純粹性とか清さとか、英知というのか、そういう

ものを保全して伝えていこう、できれば広めていこうと。

政治というものを否定するわけではありませんが、汚れざるを得ない仕組みになっている政治の世界にあっても、一人一人の政治家の心の一角に清冽な泉のような清らかさを残してほしいという、宗教はそういう役割。宗教者にも生きづらい時代かもしれないが、純粹さを残してこそ宗教者の価値があるはずですよ。

2015年5月20日付

中外日報(ほっとインタビュー)

【文責：柴田 初男】



各新聞記事から
【2015年7月～9月】

カトリック新聞、キリスト新聞、
クリスチャン新聞

7月

◇「罪」考えずに「救い」考えられず 日本福音主義神学会東部部に鈴木浩氏

「今、再び罪について考える」をテーマに、鈴木浩氏（ルーテル学院大学教授、同大学附属ルター研究所所長）が6月15日、お茶の水クリスチャンセンターで講演した。日本福音主義神学会東部部会（大坂太郎理事長）主催の春季研究会での講演。同会の会員や神学生ら70人が出席した。

ルーテル世界連盟（LWF）とローマ・カトリック教会の間に1967年に設けられた、神学対話のための国際委員会「一致に関するルーテル＝ローマ・カトリック委員会」の委員である鈴木氏。同委員会の最近の成果を紹介し、両者の距離が縮まった大きな要因として第二バチカン公会議を挙げた。「カトリック教会とルーテル教会がここまで相互理解を深めたのは、100年前には考えられないことだった」とし、「世界中の宣教の最大の障害は、教会がいくつもの教派に分裂しているという事実。教会が目に見える一致に向かって大きな努力をこれからも図っていかねばいけない」と強調した。

同氏は、アウグスティヌスが取り上げた最大のテーマである「原罪論」が、教会でも神学校でも取り上げられなくなっていると指摘し、「この奇妙な沈黙は何か」と疑問を提起。義認論の前提はアウグスティヌス的人間論＝原罪論の強固な再主張だとする神学者J・ペリカンの指摘に注目し、「義認論の力は罪認識の深さに正確に比例する。罪認識が深ければ深いほど義認論のインパクトは強くなる」と述べた。その上で、「教理的前提（原罪論）を失った義認論が、今の力のない義認論だ」と主張。「原罪論が持ち出せない現状では、嬰兒洗礼の神学的正当化はできない」とも述べた。鈴木氏が93年の論文で呼び掛けた「無視され攻撃されている原

罪論を守れ」という声に応える牧師はいまだに1人もいないとし、「罪を考えずして救いは考えられない」と訴えた。

最後に、創世記3章のアダムとエバの記述に「罪」という言葉が出てこないことに着目し、「『罪』という言葉がまがまがしく聞こえるならば、『罪』という言葉を使わないで『罪』について語る可能性がある」と指摘した。（キ4日付）

◇ 沖縄戦70年「慰霊の日」にキリスト者の祈り一語り継ぎ、未来に平和を

6月23日沖縄は、20万人以上が犠牲になったと言われる沖縄戦から70年の節目の年となる「慰霊の日」を迎えた。70年前のこの日、沖縄防衛第32軍司令官牛島満中将が自決し、4月のアメリカ軍本島上陸によって開始された戦闘が、組織的には終結したとされるが、その後も兵士以外の一般人をも巻き込んで、多くの犠牲者を生んだ。今年も沖縄では、県と県議会主催の「沖縄全戦没者追悼式」が糸満市摩文仁の平和祈念公園で行われるとともに、各地で遺族らにより慰霊祭などが行われたが、キリスト教界でも、この日を覚え、キリスト者として平和を生み出していくための集会が開かれた。（ク5日付）

カトリック新聞(7月5日)

◇ 沖縄・慰霊の日 カトリック平和巡礼 那覇教区 押川司教 今の政治・社会では「終戦を実感できない」、◇ ミサの変更 実施に向けて 司教協から小冊子発行 配布と解説、順次進める、◇ 教皇、トリノを訪問 聖骸布の前で祈る ドン・ボスコ生誕200年を記念、◇ 歴史的協定に調印 バチカンとパレスチナ2国家共存での解決支持、◇ バチカン 討議要綱を発表 10月の「家庭」シノドス

◇ “教会・教区超え、全体教会に仕える、日基教団全国信徒会 65年ぶり大会に212人

日基教団の信徒による組織「全国信徒会」が約半世紀を経て再結成された。「主にある一致」「賜物の分け合い」「会員相互の交わり」を通して、教団の福音伝道推進に寄与することを目的としている。6月9日、富士見町教会（東京都千代田区）で再結成第1回全国信徒大会が行われた。全国信徒大会の開催は、1950年以来65年ぶり。信徒・教師合わせて212人が出席し、聖餐を共にした。

（キ11日付）

◇「ラブ・ソナタ」8年 ビジョン共有し一つになる 「日本宣教フォーラム」で働きを検証

韓国ソウルオンヌリ教会のハ・ヨンジョ牧師（故人）のビジョンで始まった、オンヌリ教会と地域教会の祈りと協力で開催されてきた韓流文化伝道集会「ラブ・ソナタ」。このラブ・ソナタの働きを振り返り、その成果と課題を検証すると共に、今後の方向と戦略を分かち合う「ラブ・ソナタ日本宣教フォーラム」（オンヌリ教会宣教本部、ラブ・ソナタ日本全国実行委員会主催）が6月26、27日、東京・港区台場のホテル グランパシフィックで開催された。宣教フォーラムセッションには永井信義（ミッション東北・東北中央教会牧師、拡大宣教学院学院長）、中村敏（新潟聖書学院院長）、ムン・サンチョル（韓国宣教研究員院長）の各氏が立った。ムン氏は「ラブ・ソナタ」に関わった日韓の牧師、宣教師などに聞き取り調査をし、その結果を「トランスフォーメーション的な状況化：日本宣教の統合的なアプローチ」と題して発表した。（ク12日付）

カトリック新聞(7月12日)

◇ 第5回 東日本大震災 仙台教区復興支援 全国会議 現場に触れ、今後を考える 全国の支援者と仙台教区との連携を求めて、◇ 教皇、広報事務局を新設 パチカン広報の体制改編へ、◇ 枢機卿、新回勅を引用 国連「気候変動」会議で演説、◇ 学生主体で「難民の日」公開シンポジウム開く 清泉女子大学（東京）、◇ 国会前でスピーチ「戦争法案反対」勝谷太治司教

◇ この時代に見張り人として立つ 日本同盟基督教団が戦後70年宣言

日本同盟基督教団（中谷美津雄理事長）は、「『教会と国家』に関する戦後70年宣言文—この時代に見張り人として立つ—」を7月6日付で発表した。四つの項目を示して、戦後70年を迎える今年、あらためて「神である主への悔い改め」と、「平和をつくる者としての使命」を宣言した。

「1. 日本同盟基督教団の罪責告白」では、1991年の「宣教100周年記念宣言」で、同教団が太平洋戦争時に教会の自律性を失い国策に協力した罪を悔い改め、イエス・キリストこそ唯一の主権者であると告白したことに言及。また、96年の「宣教105周年記念大会」の宣言で、アジアの人々に偶像礼拝の強要と侵略の罪を犯したこと

を告白し、「福音にふさわしい内実を伴ったキリストの教会へと変革されること」を願ったことを紹介した。

「2. 福音派キリスト教会の誓約」では、74年の第1回世界伝道会議で採択された「ローザンヌ誓約」に言及。ここに誓約された「伝道と社会的政治的参与」をキリスト者のつとめとすべく積極的に努力してきたとし、68年の「靖国神社国家護持法案」に対する反対決議、74年の「靖国神社法案に反対する声明」を挙げた。

「3. 戦後50年から20年」では、95年以降の20年間について、「結果的にはローザンヌ誓約で謳われている『キリスト者の社会的責任』を押し広げて来ましたが、全教會的に浸透するまでには十分ではなかった」と告白。改憲の動き、学校現場における国家主義的動向、河野談話や村山談話を否定するような動きが見られることや、民族差別、沖縄への米軍基地の押しつけ、原発再稼働への動きなどを懸念した。

「4. 過去を胸に刻み、将来に向かって」では、「改めて、私たちの教団が犯した偶像礼拝と侵略戦争への加担、という過去の罪を忘れるのではなく、心に刻むことで、私たちの国が侵略し、蹂躪した国々の人々に対して心からの和解を求めていきたい」と宣言。「私たちが過去の罪を心に刻み続けるのは、その罪が主イエス・キリストの十字架で流された血潮によって贖われたことを思い出すため」と述べた。

最後に、「国家に対して『見張り人』として立てられたことを自覚し、主に代わって国家に警告を与えることによって、神の国の拡大のために、私たちに与えられた宣教の使命を果たして行くこと」を表明した。（キ18日付）

◇ 被災地支援拠点のクリスチャンキャンプ場 被災した礼拝堂再建 復興のシンボル Morigo 礼拝堂で感謝礼拝

東日本大震災で4棟ある建物のうち2棟が震災で深刻なダメージを受け、通常業務を断念し、代わりに被災地ボランティアの拠点となっていた「キリスト教森郷キャンプ場」の礼拝堂が大規模改修を行い再建した。6月27日、「Morigo 礼拝堂・再建感謝礼拝」が同所で開かれた。当日は、多くの教団教派や宣教団体の代表者、何組ものゴスペルシンガーが駆け付けた。また、

被災地支援で協力関係を持っている地元の県議、町議なども参加し、礼拝堂の再建を共に祝った。
(ク19日付)

◇ ラブ・ソナタ日本宣教フォーラム 宣教協力は実現できる 御言葉、祈り、対話で一つに オンヌリ教会も祝福得た

韓国ソウルオンヌリ教会のハ・ヨンジョ牧師（故人）のビジョンで始まった、オンヌリ教会と地域教会の祈りと協力で開催されてきた韓流文化伝道集会「ラブ・ソナタ」。このラブ・ソナタの働きを振り返り、その成果と課題を検証すると共に、今後の方向と戦略を分かち合う「ラブ・ソナタ日本宣教フォーラム」（オンヌリ教会宣教本部、ラブ・ソナタ日本全国実行委員会主催）が6月26、27日、東京・港区台場のホテル グランパシフィックで開催。3回の宣教フォーラムセッションを持つと共に、26日夜の晩餐会では、日韓の牧師、宣教師らが同じテーブルで食事をしながら交流の時をもった。
(ク19日付)

◇ 日本宣教会が10年「小さき者の視座で」 本田哲郎氏 福音宣教を議論

2005年に発足し、翌年から毎年研究会を重ねてきた日本宣教会（JMS、小田武彦会長）が、7月4日、関西学院大学梅田キャンパス（大阪市北区）を会場に、第10回全国研究会を開催した。JMSは、宣教学研究の進展にともない、アジア諸国でも宣教会が設立される中、デイヴィッド・ボッシュの著書『宣教のパラダイム転換』の刊行を契機に、翻訳に携わったカトリック、プロテスタント双方の関係者を中心に幅広い立場、背景を持つ賛同者によって設立された。

以来、研究会・講演会の開催や、ニュースレターの発行、研究内容をまとめた紀要の出版など、宣教学研究促進とともに、宣教にかかわる関係者の情報交換、交流の場としても、その働きを続けてきた。10年目となる今回の研究会では、60人を超える参加を得て、午前の本田哲郎氏（フランススコ会司祭）による基調講演「私たちは何を宣教するのか？」に続き、午後には山崎渾子、吉村厚子、趙永哲、柳沢美登里の各氏が研究発表を行なった。
(ク19日、キ8月8日付)

◇ “弱いところにこそ恵みがある、全国キリスト教障害者団体協議会が総会

「弱いところに働く力」を主題に、精神科医の石丸昌彦氏（放送大学教授、日基教団柿ノ木坂教会員）を講師に迎え、全国キリスト教障害者団体協議会（渋沢久会長）の2015年度総会・修養会が7月6～7日、戸山サンライズ（東京都新宿区）で開催された。

日基教団関東教区埼玉地区「障がいを負う人々と共に生きる教会を目指す懇談会」（埼玉アーモンドの会）が企画運営を担当。約30人が出席した。

開会礼拝では、埼玉アーモンドの会委員長の石川榮一氏（日基教団北本教会牧師）が、「信仰の約束」と題してメッセージを担当した。サムエル記下9章で両足の不自由なメフィボシエトにダビデが忠実を尽くす場面と、同5章で「ダビデの命を憎むという足の不自由な者、目の見えない者を討て」とダビデが命じる場面对比。両方とも本当のダビデであるとし、人間の両面性が描かれていることを示した。

「ダビデの弱い側面も隠さずに描くことによって、弱いままでよい、むしろそのことが大切だと旧約聖書は示してくれている」と述べ、「自分の中にある弱さが大事。家族・教会の中にいる弱い人が大事。そのことによってわたしたちは祝福を与えられる」と結んだ。
(キ25日付)

◇ 安保関連法案可決前 国政の場で祈り 始めは悔い改めから Peace Makers' Prayer Meeting@国会 “しかし、ではなく”こそ、の祈りを

戦争国家への道筋を開く、集団的自衛権を柱とする安全保障関連法案が7月16日午後、多方面からの反対意見がある中、衆議院本会議で与党などの賛成多数により可決された。可決前の13日、「このような時にいちばんなすべきことは、主の御名で祈ること」だとして、「7・13 Peace Makers' Prayer Meeting@国会」（同実行委員会主催）が、東京・千代田区永田町の衆議院議員会館多目的ホールで開催。125人が集い、国政の場で国、為政者、世界、教会のために祈りを捧げた。

(ク26日、キ8月1日付)

カトリック新聞(7月26日)

◇ 教皇 南米3カ国歴訪 パラグアイ訪問 貧しい人や子どもと共に、◇ 教皇「反論に目を通す」米国訪問前、持論批判に、◇ 「気候変動」で決断司教団、多角的取り組みへ フィリピン、◇ 理事長・施設長が研修 日本カトリック保育施設協会 東京、◇ 被災地に歌声 宗教超えお寺でコンサート 宮城・山元町

8月

◇ 戦後70年企画 連続インタビュー「本紙標語の実質を問う」(1)島蘭 進氏 宗教は「人間の安全保障」の基礎

本紙創刊から7年目の1953年に掲げられた本紙標語「平和憲法を護れ」「再軍備絶対反対」は、その後も変わることなく題字と共に掲載されてきた。当時の社説(53年9月19日付)によれば、憲法草案者の金森徳次郎までが改憲の必要を口にしたことに危惧を覚えた賀川豊彦が提案し、主筆の武藤富男が「次の号からやりましょう」と即答して8月15日付からの掲載が決まったという。

この間、その折々にさまざまな賛否両論が戦わされてきた。「標語を外せば経済的な支援をする」という類の申し出も一度ではなかった。戦後の安全保障をめぐる大きな転換点を迎えた70年目の日本。この国と教会の行方を識者に問いつつ、キリスト教ジャーナリズムのあり方を読者と共に模索したい。初回はネット上でも精力的に発信し続ける宗教学者の島蘭進氏。(キ1日付)

◇ 「信州夏期宣教講座エクステンション」で渡辺氏証言「戦争には意味がない」山口氏 広がりつつある日本主義を懸念

安保関連法案が衆院本会議で可決され、日本のキリスト教会の中でも「いよいよ日本も戦争国家へと進むのでは」と危惧される中、「2015年信州夏期宣教講座エクステンション」(信州夏期宣教講座世話人会主催)が7月20日、「日本的キリスト教を超えて～戦後70年の課題～」をテーマに、東京・世田谷区北烏山の日キ教会・東京告白教会で開催。渡辺信夫氏(日本キリスト教会教師)が「戦中・戦後の教会の混迷の歴史を手探りで掘り起こす」と題し、山口陽一氏(東京基督教大学教授)が「日本的キリスト教の最良の立場の罪責に

ついて」との題で講演した。(ク2日付)

◇ 認知症理解と教会の寄り添い実践例 TCU第5回ケアチャーチセミナー

加速する高齢化社会を背景に、全国に8千を数える教会が地域福祉の資源として機能する可能性を模索、提案する第5回ケアチャーチセミナー(東京基督教大学主催)が7月20日、同大学国際宣教センター(千葉・印西市)で開催され、約70人が参加。今回は「教会を地域にひらこう! ケアカフェのススメ」をテーマに、教会が独自に地域の高齢者向けに開いているカフェや、行政が推進する「認知症を含む高齢者にやさしい地域づくり」オレンジプランに、教会が参加する形で行う「認知症カフェ」の提案のほか、病理などから認知症を理解するための最新情報が紹介された。(ク2日付)

◇ 「キリスト教と人権思想」教会が社会担う人間を生み出す 森島豊氏(青山学院大学准教授)に聞く

現行の日本国憲法は米国からの押しつけだとする主張があるが、GHQ草案は憲法学者の鈴木安蔵が作成した憲法草案を参考にしたと考えられる。青山学院大学総合文化政策学部准教授の森島豊氏は、論文「日本におけるキリスト教人権思想の影響と課題」の中で、鈴木を始めとして、日本で人権の理念が法制化していく過程にキリスト教の影響があったことに着目している。この論文がこのほど中外日報社主催の第11回「涙骨賞」最優秀賞に選ばれた。「キリスト教と人権思想」というテーマに取り組む理由や今後の教会の課題について、森島氏に話を聞いた。(キ8日付)

◇ “平和”を取り戻す シンポ『「シャローム・モデル」の実現を目指して』安倍首相の積極的平和主義は偽善的

テロや暴力事件が世界中に頻発し、日本にも戦争の足音が聞こえてきている昨今、教会はその状況にどう対処すれば良いのか、真の平和構築とは。東方敬信氏(青山学院大学名誉教授)は、聖書からアイデアを得た「シャローム・モデル」を提示。今年5月、『地球共生社会の神学「シャローム・モデル」の実現を目指して』(教文館)を出版した。その出版記念を兼ねたシンポジウム「『シャローム・モデル』

の実現を目指して「一聖書・人権・教会」（同シンポジウム実行委員会）が7月28日、東京・中央区銀座の銀座教会で開催。東方氏、河野克也氏（ホーリネス・中山キリスト教会牧師）、森島豊氏（青山学院大学宗教主任）がパネリストに立った。（ク9日、キ9月5日付）

◇ 神の“美”にも関心を ニューヨークの先端例と各教会の取り組みを共有

アート、音楽で現代人と教会をつなぐニューヨークの先端例が共有された。都心での開拓伝道に取り組み、芸術や文化において福音中心の働きを進展しようとするグレースシティーチャーチ東京が主催し、アートによる取り組みを進めるコミュニティーアーツ東京が協賛した「ワーシップシンポジウム」が7月26日、東京・千代田区のKDD I ホールで開催された。ニューヨーク・リディーマー長老教会（ティモシー・ケラー牧師）で礼拝と音楽のミニストリーを担う、トム・ジェニングス氏と妻でソプラノ歌手のミッシェル氏が来日し、講演。都心での伝道を考える牧師、宣教師、礼拝奉仕者、音楽家、若者向けの音楽集会を始めた人など教派や教団を超えて礼拝の働きに関心のある人々が集い、テーブルごとに分かれて、互いの取り組みやアイデアについてシェアした。（ク9日付）

カトリック新聞(8月9日)

◇ 教皇フランシスコ＝気候変動と貧困の関係 強調「核エネルギー」で広島・長崎にも触れる、◇ 世界の青少年 共にミサ 山口でスカウトジャンボリー、◇ 現勢調査 日本の信者減る 14年は44万3646人、◇ 被災地の今を“見る” 聴覚障がい者ら東北訪問、◇ 米国で人気下向き 教皇に関する最新世論調査

◇ 戦後70年企画 連続インタビュー「本紙標語の実質を問う」(2) 坂内宗男氏 日本人は何も変わっていなかった

一戦後70年という節目にあたって思うことを。坂内 70年前、日本はこれまでにない未曾有の打撃を受けて敗戦し、アメリカによる占領と新しい憲法による歩みが始まりました。今の政府は「押し付け」だと言いながら、実際にはアメリカに追従しているわけで矛盾しています。現憲法制定の背景には、鈴木安蔵ら民間のグルー

プによる憲法草案があり、それも参考にしたと言われています。

わたしたちクリスチャンにとっては、イザヤやエレミヤの預言が、まさに日本国憲法によって成就したという意味で、神から与えられた恩恵だと考えることもできます。イエスは絶対平和主義者です。しかし、「棚からぼた餅」式に「平和」を得たという面では、日本は本当に変わったのか。わたしは、戦前と戦後でその底流にあるものはまったく変わらず、そこに今日の急速な右傾化があると考えています。

あの敗戦時、アジア諸国に侵攻して2千万人もの人々を殺したことに對する謝罪が一つもなく、皇居に向かって土下座して謝った。大日本帝国憲法のもと、みんな天皇の名のもとに戦ったじゃないですか。外国から見れば、天皇は戦争の最高責任者ですよ。わたしたちは戦争に駆り立てられ、肉親を殺され、祖国も荒廃したのに、なぜお詫びをしなければならなかったのか。お詫びをすべき相手はアジア諸国ではないのか。そこが、わたしの原点です。（キ15日付）

カトリック新聞(8月16日)

◇ 広島「戦争は人間(われわれ)のしわざです」戦後70年 平和への祈りと学び新たに、◇ 長崎犠牲者悼み、平和誓う＝スペインからゲルニカのマリア像も、◇ 教皇フランシスコ 広島・長崎原爆投下70年 核兵器の廃絶訴える、◇ 教皇「破門ではない」離婚・再婚の信者への配慮を、◇ 比叡山「世界平和祈りの集い」 バチカンからもメッセージ

◇ 武力によらない愛による平和実現を 原爆投下70年広島・長崎の教会

広島に原爆が投下されてから70年を前にした8月5日、広島市のカトリック教会、聖公会合同の広島平和礼拝2015が広島市の平和公園、カトリック世界平和記念聖堂で開催された。

海外から多数のゲスト、各地から集った中高生学生などで聖堂は満ちた。世界教会協議会(WCC)副議長のメアリー・アン・スエンソン主教が平和メッセージをした。世界の核問題の現状を直視し、聖書から、平和をつくるいのちを選ぶ道を勧めた。集会に先立って平和公園の原爆被爆者供養塔では平和の祈り、さらに世界平和記念聖堂まで歩く平

和行進が実施された。記念礼拝後には、テゼによる集会、徹夜祈祷会も開かれた。

キリスト教、仏教、神道による広島戦災供養会主催による合同の「原爆死没者慰霊行事」が原爆投下から70年となる8月6日の早朝に、広島市の平和公園内の供養塔前で開かれ、それぞれの形式で祈りがささげられた。

日本キリスト教団広島西分区、カトリック広島司教区、広島市キリスト教会連盟の共催で、6日に「8・6キリスト者被爆70周年平和の祈り」が広島市中区の日基教団・広島流川教会で開かれた。

メッセージは被爆時、流川教会の牧師だった谷本清牧師の子である、近藤紘子（三木志染教会員・牧師夫人）さんが「平和を作り出す人たち」と題して語り、被爆への反発や憎しみを乗り越えた経験、世界に原爆の被害を知らせたジョン・ハーシー著『ヒロシマ』のいきさつや、父や母の姿を話し、平和への思いを述べた。

長崎に原爆が投下されてから70年の8月9日、長崎市では、市内のプロテスタント教会が加盟する長崎キリスト教協議会（長崎CC）が主催する早天礼拝、平和祈念礼拝が行われた。

朝6時半からは、長崎平和公園近くの爆心地、原爆落下中心碑前で、平和記念日早天礼拝が開かれ、栗山尚典氏（日基教団・長崎平和記念教会牧師）が、コロサイ人への手紙3章から「光のあるうちに」と題して奨励した。

午後2時半からは、長崎市富士見町の長崎平和記念教会でユーオーディアアンサンブルによる「平和ミニ・コンサート」、3時から「長崎被爆70年 平和祈念礼拝及び被爆70年記念誌『平和への希望と祈り』出版記念感謝礼拝」が開かれた。地元教会の賛美チーム、活水高等学校のクワイアや長崎プロテスタント合唱団などによる特別賛美、聖書朗読と祈りと共に、被爆70年記念誌編集委員長でもある竹内款一氏（日基教団・長崎銀屋町教会主任牧師）が説教。その後、牧師、信徒の代表と会衆とが交互に「平和を求める祈り」を捧げ、祝祷を長崎CC委員長の藤井清邦氏（日基教団・長崎古町教会牧師）が捧げた。

夜には浦上天主堂から平和公園まで、被爆マリア像を載せた神輿と松明を持った信徒らが歩く「たいまつ行列」が行われた。

平和公園に到着すると、広島・長崎のキリスト者（カトリック、プロテスタント）の共同平和ア

ピール「今こそ、武力によらない、愛による平和の実現を！」が、プロテスタントの牧師、カトリック司祭の代表により読み上げられた。

（ク23日、キ9月5日付）

◇ キリスト教の贈り物で活気を「たらんと」フェスティバル

キリスト教系の福祉作業所、メディア、物流、食品、グッズ、冠婚葬祭業、ウェブデザインに携わる教会、キリスト教団体が、それぞれの製品やサービスを知って利用してもらい、キリスト教会を活気づけるためのプラットフォームを形成し始めている。

有志実行委員会は、ギフトカタログ「たらんと」を企画し、そのキックオフイベントとして「たらんとフェスティバル」を8月1日に、東京・中野区の東中野キングス・ガーデンで開催した。「たらんと活用セミナー」では「新宿 栄光堂」の片岡文子さんと「べてぶくろ」の向谷地宣明さんの対談、カタログの展望が語られた。質疑応答も交え、教会との関係、経済活動の意義、製品開発の工夫と努力、障害者の社会進出、宣教的意義などについて実践例とともに話し合われた。

ギフトカタログは10月ころに完成予定。

「たらんと掘り出し市」では、20団体以上の多様な出店があり、交流の機会になった。

（ク23日付）

カトリック新聞(8月23日)

◇ 教皇フランシスコ 家庭にはお祝いが必要 生活が真に人間らしくなる、◇ 教皇、9月1日を環境保護の祈願日に、◇ 宗派超え 広島でシンポ＝「二度と戦争を起こさない」、◇ 地元の人員増など検討 東北被災地の支援者ら会議 仙台・元寺小路教会、◇ 高見大司教 米國務次官と会談 核兵器問題など意見交換

◇ 敗戦70年の8月15日 千鳥ヶ淵で8・15平和祈禱会

敗戦70年を迎えた8月15日、東京・千代田区の千鳥ヶ淵戦没者墓苑では、毎年恒例の「8・15平和祈禱会」（同実行委員会主催）が開かれ、例年以上の参加者が集った。説教者は『靖国の闇によろこそ』著者の辻子実氏（バプ連盟・恵泉バプテスト教会員）。辻子氏は「お

前たちの鋤を剣に、鎌を槍に打ち直せ」(ヨエル3・10、新共同訳)を引用し、「エノラ・ゲイの乗組員に対し、ウィリアム・ダウニーという牧師は、出陣のため祈った。そして原爆が広島に投下された。平和を切望しつつ、原爆が投下された。教会は平和の個所だけでなく、戦争の個所を伝えて行くべきだ。そして、『弱い者に「私は勇者だ」と言わせよ』という聖書個所をどう読むのか、教会は問われている」と語った。説教の後、グループに分かれ、日本が戦争をする国にならないように、人を殺し、殺され、殺させる国にならないようになど、平和を願い祈り合った。(ク30日付)

◇「不服従の権利」行使を 名古屋8・15平和集 会で池住義憲氏講演

8月15日、日本バプテスト連盟中部地方連合総合プログラム委員会主催の「8・15平和集会」が日本バプテスト名古屋キリスト教会で開催された。

講師は、「自衛隊イラク派兵差し止め名古屋訴訟」を提訴し、2008年に名古屋高裁で自衛隊活動の一部に「違憲」判決を獲得した、池住義憲氏。講演題は「戦後70年 いま平和が危ない!～キリスト者としてどう向き合うか～」。政府による憲法解釈の変遷を整理し、現在議論されている「安保法制」の政府説明を批判。おかしいと思ったことにキリスト者が声を上げ、「服従しない権利」を行使すべき、と語った。(ク30日付)

カトリック新聞(8月30日)

◇ 教皇フランシスコ 仕事と家庭の時間 両立を生産性とは何? 誰のため?、◇ 香港の枢機卿 中国当局を非難 続く十字架撤去に抗議、◇ 日本カトリック医師会 最後の医療支援(メディカルミッション) フィリピンで30年以上奉仕、◇ “戦争法案”に反対=全国の宗教者 東京で集会・デモ、◇ 「積極的平和」主義 本来の意味を説く「平和学」の父 東京で対談



9月

◇「道徳の教科化」で行動と心が統制 8・15東京集 会で池田賢市氏が講演

8月15日、「敗戦70年 道徳教科化を考える一子どもたちを戦場に送り出さないために」と題して、第42回「許すな!靖国国営化8・15東京集会」が在日本韓国YMCA(東京都千代田区)で開催された。フランスにおける移民の子どもへの教育政策を専門とし、「道徳の教科化」について発言を続けている池田賢市氏(中央大学文学部教授=写真)が講演を行った。

今年3月、文部科学省が学校教育法の施行規則を改正し、道徳を「特別の教科」と位置づけた。池田氏は、道徳が教科になることは、評価・評定の対象になるということであり、「心の持ちようを国家権力が判断することが、教科化の最大の問題」と主張した。

同氏は憲法25条に触れ、健康は「権利」であり、その権利を守るために国は福祉や公衆衛生の向上・増進に努めなければならないと定められているが、2002年の健康増進法はこの関係を逆転させ、健康を国民の「義務」としていると指摘。しかも同法が「生活習慣」を問題にしていることから、「国によって自分たちの体が管理される法律」だと述べ、道徳の教科化は、健康増進法の「体」「健康」を、「心」「道徳」に置き換えたものだと説明した。

その上で、評価のためには到達目標を決めなければならない、それが道徳にできるのか疑問視した。「道徳は生活の仕方そのもの。価値観そのもの」と述べ、発想や行動はさまざまな条件によって決まるのであり、そうした文脈を無視すれば、現実の道徳から離れることになる、と論じた。

また、評価という手段を通して子どもの行動や発言が規制されていくことを懸念。「心の中でいくら安倍政治を許さないと思っても、政府を批判する発言はしない——そのような癖をつけるということではないか。どういう行動が褒められる行動なのか、道徳で学ばせるということだと思う。そのうち行動を通して心自体が統制されていく。政府批判など思いもつかなくなっていくと思う。学校生活に馴染めば馴染むほど批判的観点がなくなっていく」と訴えた。

この集会は、日本キリスト教協議会（NCC）靖国神社問題委員会と東京地方バプテスト教会連合社会委員会の後援で開催された。

（キ5日付）

◇ 第16回「地方伝道を考える」シンポ 地方神学校と教会の闘い

北関東神学研修センター主催の第16回シンポジウム「地方伝道を考えるー自立と連帯ー」が8月20、21日、新潟聖書学院を会場に開かれ、教職者、信徒合わせて24人が参加した。今年のテーマは「地方神学校と教会の闘い」。会場となった新潟聖書学院は、1952年に当時「柏崎聖書学院」として開講以来、北陸の地にあつて地元の教会に仕える教職者を、60年以上にわたって輩出してきた。参加者たちは、地方にある神学校と教会が直面する課題を共有し、それぞれが担っている使命を確認する時となった。

（ク6日付）

カトリック新聞(9月6日)

◇ 家庭に必要な祈りの時間 神の愛に気づく心
皇、就任後100回目の一般謁見で語る、◇ 安保法案に反対＝8月30日抗議集会 宗教界代表し、司教が発言、◇ 札幌で全国大会 教区が3年準備 日本カトリック障害者連絡協議会、◇ 震災後の生き方学ぶ地域の人と“カフェ”勉強会 福島・原町教会、◇ 横浜教区高校生大会 “同じ年頃”の体験聞く 戦時中10代だった人ら招待 静岡

◇ 安保法案に抗うねりを「殺さない、殺させない」学者・宗教者が声上げる

安全保障関連法案に反対する動きが大きくなっている。7月16日に同法案が衆議院を通過してから、各大学の教職員・学生有志による声明が相次いで発表され、賛同者の数も日に日に増している。キリスト教主義大学による合同の集也会も開催されるようになった。また、教派を超えた宗教者の抗議行動も活発化している。

（キ12日付）

◇ 魂への配慮に生きる共同体に DPC主催デール記念講演に加藤常昭氏

日本ルーテル神学校の附属研究所「デール・パストラル・センター」（DPC、石居基夫所長）は8月1日、説教塾主宰の加藤常昭氏（日基教団隠退牧師）を講演者に迎え、第2回デール記

念講演「魂への配慮の共同体・教会」を開催した。会場の日本福音ルーテル東京教会（東京都新宿区）は、180人の参加者で満席となった。加藤氏は、かつて東京神学大学で実践神学教育を担ったことに言及し、活動の中心領域は説教であったが、実践神学の学びの出発点は神学者エドゥアルト・トゥルンアイゼンとの出会いにあり、そこから始まる牧会学の学びも大切なものだったと振り返った。

1956年に石川県の金沢で伝道を始めた加藤氏が自分の道を見失ったとき、指針を与えてくれたのがトゥルンアイゼンであったとし、「それ以後、教会の実践を考える時に、いつもトゥルンアイゼンを起点にしてきた」と明かした。

トゥルンアイゼンは著書の中で、万人祭司の理念を実現するのは魂への配慮に生きる教会だと考えていたとし、そこでの教会とは、「キリスト者の共同体」としての教会だと解説。信徒が主体となって関わる信徒共同体が形成できるかを問題とし、教会が寺院化し、その営みが形骸化することを危惧した。

その上で、トゥルンアイゼンが牧会を二人きりの対話と捉えたことに触れ、それはルター派の「さんげ」の対話の伝統を受け継ぐものだとして解説。「一般的に語られた説教が、礼拝が終わって二人きりになった時、その人の状況に応じて具体的な意味を持つ」。

そして、今日の教会が厳しい伝道の行き詰まりの状況にある一つの理由は、説教が力を失っていることにあると指摘。説教が儀式化しており、それを助けているのが、教派を超えて広がっている講解説教の一般化にあると述べた。「説教が、しばしば聖書に忠実なようで、聖書のいのちある言葉を、今ここで聴くべき神の言葉を伝えることに成功していない。聖書の言葉を正確に説き明かしていれば、それで責任を全うしていると思込んでいる」とし、「説教がすでに魂への配慮の対話になっているか」と問いかけた。（キ12日付）

◇ 大学生、憲法研究者 安保法案に対し発言 9・1PMPM@国会2

戦争国家への道筋を開く、集団的自衛権を柱とする安全保障関連法案（安保法案）が参議院で審議されている中、「平和をつくる者は幸い

です」(マタイ5・9)のイエスの言葉を覚えながら共に祈ろうと「9・1PMPM@国会2」

(同実行委員会主催)が9月1日、東京・千代田区永田町の参議院議員会館講堂で開かれ、150人が参加。横浜市立大学3年生でSEALDsメンバーの桑島みくにさんがスピーチをし、憲法研究者の稲正樹氏(国際基督教大学客員教授)が講演した。参加者は、国政の場で平和を求めて祈り合った。(ク13日付)

カトリック新聞(9月13日)

◇ 安保法案に抗う?うねり?を「殺さない、殺させない」学者・宗教者が声上げる、◇ 「学者の会」会見にキリスト教大学も、◇ 都教職員有志がメッセージ?教室に平和の種を?1千人超が賛同、◇ 点字月刊誌『信仰』が100周年 戦時中も途切れず「日本の盲界の光に」、◇ 魂への配慮に生きる共同体にDPC主催デール記念講演に加藤常昭氏、◇ 戦後70年企画 連続インタビュー「本紙標語の実質を問う」(4) 三谷 康人氏 広い視野の中で考える時

—戦後70年という節目にあたって思うことを。

三谷 終戦(8月15日)の1週間前(広島原爆投下の2日後)、わたしの住んでいた福山市はB29の爆撃を受けて焼け野原となりました。幸いわたしの家は郊外で難を免れましたが、5分先に焼夷弾が落ちました。翌日、市内には数百人の死体が川縁に並べられていました。多くの人々は住む家がなく、野宿しながらの生活が続きました。いったい何のための戦争だったのかと虚脱感に襲われ、生きる目的を失いました。中学4年でした。

2年後に高等学校(旧制)に入学し、人生の目的は何か、何のために生きているのかななどを議論しました。終戦後ですから本はほとんどありませんでしたが、たまたま書店で見つけた岩波文庫の『西郷南洲遺訓』を読み、特に「敬天愛人」の考えに深い感銘を受けました。内村鑑三の『後世への最大遺物』との出会いも忘れられません。彼は後世への最大の遺物はお金でも、名誉や地位や事業でもなく「勇ましい高尚なる生涯である」と言いました。

このような言葉を心に留めながら、戦後を歩んできました。そして33歳の時、キリストに出会い、救われました。その時からわたしの人生

は、聖書の言葉に従って生きる力をもらうものへと変わりました。(キ19日付)

◇ 明治期キリスト者の神道理解を研究 京大でプロジェクトチーム発足

明治期キリスト教指導者たちの神道理解について、研究と資料保存の構想が進みつつある。日本プロテスタント教会史を語る際、札幌・熊本・横浜の三大バンドをもって紐解くのは一般的であるが、それだけでは全体を把握できない。

このほど日基教団信濃町教会の助成を受け、洪伊杓(ほんいびよ)氏(神学博士・京大大学院キリスト教学)を中心にプロジェクトチームが発足し、特に、松山高吉(まつやまたかよし)の資料の収集・分析、デジタル化を行おうとしている。

松山高吉は1847年、越後国(現在の新潟県・糸魚川市)に生まれた。京都で学び、江戸にて平田鉄胤から国学の手ほどきを受けた。国学者として世に出た後に1872年、28歳の時に神戸でD・C・グリーン宣教師より受洗し、キリスト教に改宗。新島襄らと日本基督組合教会、同志社の創立を主導し、聖書翻訳や讃美歌編纂をした中心的人物。後に同志社で神道や日本宗教史を講じ、その著作『日本の神道』『神道起源』などで、日本古来の「神」観念をキリスト教に結び付けようとした。

1896年以前、海老名弾正が組合教会の神道解釈を主導するよりも前に、松山は活動した。50歳で聖公会へと移った後、89歳まで生きた。

今年7月11日、京都大学で開かれた第14回京都基督教学会で洪氏は、「近代日本のキリスト者における神道理解の類型論」と題して発表した。「日本のキリスト者の神道理解は時代と人物によって多様な様相を見せながら変遷してきました。類型化して考察することで、近代日本のキリスト教が持つ特殊性を具体的に究明できると思います」。

神道理解を軸に教会史をたどることは、批判的に日本のキリスト教と対峙する視点を可能にする。明治から戦後へと通じる日本の国家論、特に宗教観と天皇制の関係を含む当時の「神学」の解明となろう。

同プロジェクトには、松山高吉の玄孫にあたる聖公会の聖職候補生、松山健作氏(ウィリア

ムス神学館)も参加している。(キ19日付)

◇ 日本的キリスト教を超えて 戦後70年の課題 第23回信州夏期宣教講座

「第23回信州夏期宣教講座」(同実行委員会主催)が8月24日から26日まで、長野県上田市平井の霊泉寺温泉中屋旅館で開かれた。テーマは「日本的キリスト教を超えて一戦後70年の課題」で、山口陽一(東京基督教大学教授)、柴田智悦(同盟基督・横浜上野町教会牧師)、登家勝也(日キ教会・横浜長老教会牧師)、金芳植(在日大韓教会長老)の4氏が講演。戦後70年の今年、改めて教会に問われている「どのような福音を語ってきたか、今語っているか。そしてこれから語っていくのか」を考える講座となった。(ク20日付)

カトリック新聞(9月20日)

◇ 教皇 婚姻無効訴訟の過程 自発教令で簡素化へ「特別聖年」から発効、◇ 茨城・宮城 豪雨被害 常総教会 信徒宅5軒水没、◇ 故相馬信夫司教と中村葉子修道女に東ティモール功労賞、◇ 教皇フランシスコ 危機的難民の受け入れ 欧州の全教会に訴える、◇ 排他的なら博物館 教皇教会に「扉開けて」と要望

◇ 「安保関連法案」ヤマ場 国会前に人の波 牧師・信徒も連日参加 和解と平和進める使命

安保関連法案をめぐる与野党の攻防がヤマ場を迎え、国会前での抗議行動も日増しに熱を帯びている。8月30日、「戦争させない・9条壊すな!総がかり行動実行委員会」と「SEALDs(シールズ)」が呼びかけた国会周辺でのデモには、雨天にもかかわらず約12万人(主催者発表)が参加。全国各地で同日行われた集会への参加者も合わせると30万人を超えると思われる。

歩道を埋める人波の中には、「平和を実現するキリスト者ネット」「カトリック正義と平和協議会」の幟と共に多くの信徒や牧師、神父の姿も。幸田和生氏(東京教区補佐司教)は、街宣車の上でマイクを取り、日本の教会が結果として戦争に協力した歴史への悔いを語った。

翌9月1日には、参議院議員会館で開催された「9・1 PMPM (Peace Makers' Prayer Meeting) @国会2」に、キリスト者ら約150人が集まった。企画したのは、同法案について国会議員への要請を行う「特定秘密保護法に反対する牧師の

会」のメンバーら実行委員会。7月13日に衆議院第一議員会館で125人を集めた第1回目に続いての開催となった。(キ26日付)

◇ 新連載 首都圏の宣教を考える1 伝道の学び、繋がりにニーズ

日本の中枢であり、世界的にも最も人口が集中する「首都圏」。東京・神奈川・埼玉・千葉各都県で人口は3千万、プロテスタント教会数は2千に及ぶ。このエリアの宣教課題は多様だ。11月20~22日に東京の武道館で、首都圏の諸教会とビリー・グラハム伝道協会の協力による5万人規模の伝道集会「セレブレーションオブラブ with フランクリン・グラハム」(以下、セレブレーション)が開催される。この連載では、同集会スタッフの思い、地域教会の目線に触れながら、セレブレーションを迎える首都圏(引いては日本)の宣教課題を考えていく。第1回はスタッフの阿部頼義さんに聞く。

事務局での役職は、教会協力/運営事務オフィスサブリーダー。各ミーティングの準備、調整、出席、またユース(青年)やキッズ(子ども)プログラムの事務的橋渡しもしている。

準備を進める中で、教会のニーズもうかがえた。「すでに関連のコンサート、特別ゲストのイベントなど様々あったが、関心が高かったのは、『学び』です」。

3月に開かれた個人伝道セミナーには、100人の予想に250人以上が参加。6月に開かれた、信徒向けの「クリスチャンの生活と証しコース」のためのインストラクター養成合宿では、50人の予定に約100人参加。そして8月から同コース(~9月30日)が始まると、埼玉、千葉、東京、神奈川各都県70以上の教会を会場に2千人近くが集った。

首都圏のもう1つのニーズは教団・教派を超えた交わり。「今までなかなか会うきっかけがなかった人々と交わり、一緒に働くことができ、各地域が強められている。私の地域でも『セレブレーションが終わっても何か続けよう』と熱が上がっている。地域の教会のネットワークができることで、地域のニーズに応える様々な働きが生まれると思います」。

今後は、協力教会、ボランティアの信徒の動員、調整が山となる。「何よりも霊的に整えられ、一人ひとりが大会を見直し、友だちを連れ

て行こうという思いになること。プログラムではなく、ムーブメントです。目に見えない伝道の情熱のムーブメントがひろがっていかればと思います」
(ク27日付)

◇ 台風18号 大雨災害 茨城・常総市、栃木・鹿沼市で教会関係者被害

9月9、10日の台風18号の大雨による被害では、茨城県常総市鬼怒川が決壊したほか、関東、東北を中心に各地で甚大な被害をもたらした。キリスト教会関係でも浸水や土砂の被害を受けた所が複数あった。13日までは、各教団教派やネットワークを通じて支援活動が始まった。茨城県では16日現在2千300人が避難所に避難。宮城、栃木各県でも300人ほどの避難者がいる。物的被害ほか、疲労、喪失感、今後への不安など精神的な課題もある。17日未明からの大雨はさらなる不安をもたらし、地域の復興には時間が掛かりそうだ。現地の教会への連絡の殺到や疲弊もあり、各教団で連絡窓口を設置している。
(ク27日付)

◇ 教会こえ信徒、牧師らまちに目線 戸田宣教フォーラム

「主によってこの時代に、戸田市に遣わされている地域教会のクリスチャンが、顔を合わせ、互いのことを知り、戸田のことを深く知ること、宣教を共に担う、広いキリストのからだを形成する機会として」、戸田市宣教フォーラムが、8月30日に埼玉県戸田市の戸田福音自由教会で開かれた。

市内に立地する、4教会すべてから牧師、信徒が集い、各教会の特徴、まちづくりの取り組みについて共有。お互いと戸田市のために祈った。
(ク27日付)

(カ：カトリック新聞、キ：キリスト新聞、ク：クリスチャン新聞)

【文責：柴田 初男】



各雑誌記事から 【2015年7月～9月】

7月

「百万人の福音」

◇ 特集：北陸キリスト教の旅

1. 北陸キリスト教トリップ ガイド 石川・富山・福井、2. 北陸クリスチャン人物伝 亀谷凌雲、トマス・C・ウイン、3. 北陸で振興に生きた人々、◇ 旬人彩人：津軽三味線奏者 新田昌弘、◇ あしあと：医師 有馬 滋、◇ 連載：①クリスチャン弁護士の日々思うこと、②ひきこもり院長のつれづれ日記、③侍クリスチャンのススメ、④ひかりの道すじ、⑤ぷんぷんのこと、七月、⑥聖書メガネで映画を見れば、⑦ブルーグレイの空の下で、⑧この町この教会：インマヌエル深川教会、⑨教会津々浦々：宮城県・大分県、⑩ブルーリボン・レポート35、⑪いのちの砦 31、⑫明日へのピクニック

「信徒の友」

◇ 特集：希望の苗を植える

1. 若者が憧れる老人になる、2. 執事定年制という試み、3. ネパールで教師の卵に絵画指導、4. 教会へ遺産を寄贈しよう、◇ 特別読物：現地報告 ネパール大地震—被災地の今、◇ 連載：①教会のトピックス、②わが家の“わんにゃん”！、③献堂しました、④祈りの大地、⑤ひかり&しおん、⑥キリスト教と香りの世界、⑦聖なる光と祈りの空間、⑧シネマへの招待『ディオールと私』、⑨みことばにきく、⑩預言者の声に聴く、⑪あらすじで読むキリスト教文学、⑫私のがん体験記、⑬伝道推進室だより、部落解放センターだより、⑭キリスト教学生寮のいま、⑮被災地からの問い、⑯マンガ キリスト教入門、⑰神に呼ばれて [聖職者編] [信徒編]

「福音と世界」

◇ 特集：戦後70年の教会と神学 1

1. 戦後の新約聖書学がやり残したこと、2. 戦後日本の旧約聖書学の歩み、3. キリスト教史学の展開と課題—戦後の歴史神学をたどりつつ、◇ 柏井園略伝—没後九十五年に寄せて (上)、

◇連載：①聖書 味読7 「青銅の眼」—申命記32章48—52節、②韓国教会通信10. 非常識に生きるキリスト者、③カナダ教会通信4 子どもたちの居場所、④宣教学・事始め3 (3) 宣教Aは絶滅危惧種である、⑤レヴィナスの時間論『時間と他者』を読む4、⑥CHRISTIAN ICON キリスト教美術案内4、⑦現代日本の福音 (エヴァンゲリオン) 11. 『DEATH NOTE』、⑧佐藤優のことばの履歴書16 沖縄の自己決定権、⑨南島キリスト教史入門9 迫害と苦難を越えて、⑩詩編の思想と信仰125 詩編119篇 (5)、⑪私のごすべるくろにくる43 2012 かかわらなければ、⑫新約釈義 第一コリント書16 (1:10—17)

「舟の右側」

◇ FEATURE: 「イスラム国」と、キリスト者への迫害、◇ SERIES: 教会と教会堂「立川福音自由教会」、◇ TESTIMONY: 姉との比較を乗り越えた日、◇連載：①神様に呼ばれてどこまでも！、②必要なことはただ一つ、③黙示録の今日のメッセージ、④被造物管理の神学シリーズ その9、⑤旧約聖書の誤解・正解・分からない、⑥夫婦の癒しと回復を求めて、⑦ジャンル別新聖書解釈入門、⑧月ごとに、週ごとに、⑨周知一筆、⑩一押し書評『神なんていないと言う前に』、⑪話題の一書『神の小屋 THE SHACK』

「HAZAH」

◇特集： ジャパンギャザリング in 神戸

1. 日本が大切な理由は何か、2. 日本の役割とアジアのサポート、3. 賛美セミナー付き奉仕、4. 女性の輝く時、◇連載：①創造と福音、②過越祭 (ペサハ)、③赦し—究極の奇跡、④今聖霊が教会に語っておられること15、⑤全焼のいけにえの4つの部位、⑥イスラム内部の二大衝突とイスラム国2、⑦インド宣教の証、⑧愛とロマンの地へ、⑨花園ラグビー場ゴスペルフェスタ開催！、⑩信仰の失墜

「福音宣教」

◇特別企画：神を愛し、人を愛す⑥

1. ゲリラ的に振る舞う、◇番外編：希望への物語 1. 原町ベースの今、2. 違いを乗り越えて—畠中千秋氏に聞く、◇月間テーマ：教育未来の若者たちに何を伝えるのか 1. 「大いなる物語」から「私の物語」へ—中学生と聖書の学び

一、2. ミッションスクールに未来はあるか、3. 学問と教養教育—そのあるべき姿、◇連載：1. 奉献生活への招き⑦、2. 一人ひとりが大切にされる社会に向けて⑦、3. キリシタンの生き方に学ぶ⑦、4. みことばが互いに響き合って—ことばの典礼を生活に生かすために、5. 食卓からのおもてなし—祈りをこめて⑧

「福音と社会 No. 280」

◇バチカン報告：「主のいつくしみの特別聖年」を前に 共生実現促す教皇の東奔西走、◇現地最新情報：フランシスコ教皇が新回章を發布「包括的エコロジーに目覚めよ」、◇インタビュー：印刷博物館学芸員・中西保仁さんに聴く「ヴァチカン教皇庁図書館」の存在を少しでも多くの人に知ってもらいたかった、◇聖書の言葉：風をしかるイエス、◇鐘桜：「論語読みの論語知らず」、◇カトリックアイ：「政治」戦力保持で同盟国に貢献したい安倍首相が目論む“究極の解釈改憲”に反対する、◇読者の考察：1. 「死刑制度」—「極刑」は国家権力が国民を従わせる手段、2. 「日本版ノーマライゼーション法」ASD に対応しうる制度設計に関する考察、◇祖母と孫が語り合う「戦争と平和」②⑧、“不可能”を“可能”にしたとき、人は変化し始める、◇紹介・心に残る映画『十戒』『エクソダス』、◇連載：ノンフィクション—封印された殉教②⑧バチカンと戸田師と憲兵と (二)、◇グラフ：カラーグラフ キリストの風薫る街ぶらり・ぶらり③⑦ ピザ (イタリア)—芸術の粋を集めたキリスト教信仰の殿堂が科学発展の舞台となった理由を巡る禅問答

「羊群」

◇今月のテーマ：心の健康への無関心

1. 特別寄稿：「神と和らぐ」、◇連載：①アルコイリスからの便り「本当の土台」、②イエスのたとえ話「祈りに関するたとえ」、③性について本当のことを知りたい「結婚する相手は異性です」「男と女の違いとは」④信仰寸言「自分だって同じ」、⑤羊群社発行図書のご案内、⑥一緒に学ぼう「創世記41章—42章」、⑦7月の祈り「向上のために」、⑧今日のみことば「啓示、ナホム、初代教会」、⑨羊飼いのコラム「愛の共同体を作る努力」

「Ministry」

- ◇ 特集：あれから70年 和解を求めて
- ◇ シリーズ・21世紀 神学の扉「N・T・ライトの神学」、◇ インタビュー： ハタから見たキリスト教「山本 弘さん」、◇ 新連載：1. 「教会教育」再考 高齢者との関わりから一高齢者ってだあれ？、2. “中堅”説教者奮闘記—国会前に響く「ことば」のチカラ、連載：①礼拝「ことば」学ゼミナール 祝祷 ①祝祷の言葉、②説教鑑賞「愛か、死滅か」、③ワタシの礼拝論 礼拝改革試論(4)～礼拝の主題と教会暦、④海外TOPICS 人物で見る中国キリスト教、⑤マンガ「こちらミニスト編集部」、⑥リレー連載「牧師たちの日常」、⑦マスターと考える「教会経営コンサルティング」入門、⑧電脳牧師に訊く IT 活用術、⑨雑誌拾い読み、⑩新刊さんいらっしやい「ニセ科学を10倍楽しむ本」ほか、⑪専門書店売り上げランキング、⑫掲示板 読者からの手紙、⑬対談：キリスト教福祉と癒し、⑭空想神学読本「涼宮ハルヒの憂鬱」にみるキリスト者の選択

「季刊 教会」100号

- ◇ 巻頭論壇：新たな時代への「教会」の使命、
- ◇ QK論文： 1. 聖霊による教会形成の課題、2. 近代日本の伝道者に聞く その五 逢坂元吉郎—「受肉のキリスト」の体験—、3. 創造への問い その13 <心と体、そして霊性>、
- ◇ 特集「100号を記念して」 随想：1. 季刊『教会』の25年 その意味とこれからの展望、2. 季刊『教会』第100号を迎えて/馬場康夫、3. 改革長老教会協議会の未来、4. 季刊『教会』100号を迎えて/小堀康彦、5. 「QK」100号に寄せて、6. 関西地区会の活動と展望、7. 開拓協力伝道の証、8. 九州における協議会運動の土台、9. 改革長老教会の務め—季刊「教会」100号に想う、10. 「改革される」ということ、11. 季刊「教会」の役割について、12. 教会形成に仕えるために、13. 季刊「教会」100号を発行するにあたり、14. 福音を正しく宣べ伝えるために、◇御言葉の味わい(17)：1. 旧約編「箴言」、2. 新約編「コリントの信徒へ

の手紙I」、◇ウェストミンスター大教理問答リレー黙想、◇本のオアシス：1. <わたしを変えた一冊>佐伯晴郎訳『われらイエスを知るや』、2. 本の道しるべ(ブック・レビュー)、◇聖書霊解：1. コリントの信徒への手紙二11:16-33、2. コリントの信徒への手紙二12:1-10、◇海外ニュース： 香港の教会と神学校、◇牧会八七話：二人ずつ遣わされた

「百万人の福音」

- ◇ 特集：憎しみの先へ
- 1. 後藤健二という生き方、2. 過去と向き合う ヴァイツゼッカー、3. 憎しみを超えて広島に被爆体験から、4. ななみがルワンダでみてきたこと、5. クリスチャンによる大虐殺はなぜ起こったのか？、◇ 旬人彩人：更正支援団体「チェンジングホーム」代表・牧師野田詠氏、◇ あしあと：平和と和解のために鈴木伶子、◇連載：①マンガ ななさんぽ、②いのちのことばが人生を拓く、③ひきこもり院長のつれづれ日記、④侍クリスチャンのすゝめ、⑤ひかりの道すじ、⑥ぷんぷんのこと、八月、⑦聖書メガネで映画を見れば、⑧ブルーグレイの空の下で、⑨この町この教会：日本基督教団 和戸教会、⑩教会津々浦々：石川県・山口県、⑪ブルーリボン・レポート36、⑫いのちの砦、⑬マンガ すてきな毎日、⑭マンガ、喫茶ホーリー、⑮コトノハラボセレクション、⑯明日へのピクニック、⑰もぎたてぶどう倶楽部 お便り・BOOK、⑱ 今月のみことば一句

「信徒の友」

- ◇ 特集：平和を受け継ぐ
- 1. 危機の今、平和への決意と実践を、2. 「戦争の記憶」に学ぶ、3. 平和へ！私たちのアクション、4. キリスト教会の平和宣言、◇特別読物：①被爆70年 広島の教会、②『沖縄うりずんの雨』『戦場めし』『戦場めし』、◇連載：①祈り、②教会のトピックス、③わが家“わんにゃん！”、④献堂しました、⑤祈りの大地、⑥ひかり&しおん、⑦キリスト教と香りの世界、⑧ 聖なる光と祈りの空間、⑨シネマへの招待『ひつじのショーン』、⑩みことばにきく、⑪預言者に聴く、⑫あらすじで

読むキリスト教文学 三浦綾子『水なき雲』、
⑬私のがん体験記、⑭伝道推進室だより、部
落解放センターだより、⑮キリスト教学生寮
のいま、⑯被災地からの問い、⑰マンガ キ
リスト教入門、⑱神に呼ばれて〔聖職者編〕
〔信徒編〕

「福音と世界」

◇ 特集：戦後70年の教会と神学 2

1. 戦後・組織神学の歩みと課題、2. 戦後
日本の実践神学の展開―「牧会百話」から
「教会と世界の間を問う」学べ、3. 戦後
日本の神学教育―焼け野原から現在まで、4.
権利と権威を求めて―戦後日本の女性神学の
歩みと課題、◇柏井園略伝―没後九十五年に
寄せて（下）、

◇連載：①聖書味読8「舟に還る」―ヨナ書4
章2節、②現代日本の福音（エヴァンゲリオン）
12『死神くん』、③中国教会通信10 香
港の雨傘運動と香港教会、④ドイツ教会通信
ン4 アジアの兄弟姉妹と共に、⑤宣教学・事
始め4（4）間奏曲―出版による宣教、⑥レヴ
ィナスの時間論『時間と他者』を読む5、⑦
CHRISTIAN ICON キリスト教美術案内5、⑧佐
藤優の言葉の履歴書17 祈りと行為、⑨南島
キリスト教史入門10、迫害と苦難を越えて、
⑩詩編の思想と信仰126 詩編120篇、⑪私
のごすべるくろにくる44、⑫新約釈義 第一コ
リント書17（1:10-17）

「舟の右側」

◇FEATURE：N. T. ライト 人と神学

1. N. T. ライトとは誰なのか？、2. Reading
the Bible the Wright Way ―N. T. ライトと読む
聖書の物語、◇TESTIMONY：個人伝道に召され
た人生、◇TEACHING：「浄・不浄」について
―コリントの供えの食肉問題から、◇一押し書
評：『ザグロスの高原に行く ～イザヤによる
クル王の遺産～』、

◇連載：①神様に呼ばれてどこまでも、②必要
なことはただ一つ、③黙示録の今日的メッセ
ージ、④被造物管理の神学シリーズ その10、⑤旧
約聖書の誤解・正解・分からない、⑥教会成長
ここがポイント、⑦夫婦の癒しと回復を求めて、
⑧ジャンル別新聖書解釈入門、⑨月ごとに週ご
とに、⑩風知一筆「強み」と「弱さ」が用いら

れる

「HAZAH」

◇ 特集：七つの山 メディア&芸術

1. メディアの役割と可能性、2. クリスマ
ンと礼拝賛美、3. 私の実践的メディア論、4.
メディアの山を信仰によって勝ち取る、◇連載：
1. 創造と福音、2. 過越祭（ペサハ）、3. 人
間みんな盲人、4. 全焼のいけにえの4つの部位、
5. イエスの御顔を仰ぐ、6. ギャザリング in
神戸、7. 本文批評学の中の光と闇⑭、8. 今聖
霊が教会に語っておられること16、9. ダビデの
幕屋、10. 愛とロマンの地、11. 彼らは理由
なしに主を憎んだ

「福音宣教」8・9

◇ 特別企画：対談 神を愛し、人を愛す⑦

1. フェミニスト神学も思いがけない形で、
◇番外編：希望への物語： 苦難の意味（上）、
◇月間テーマ：戦争と平和 1. 平和について
―イエスのメッセージから―、2. 十六世紀フ
ランスの宗派的境界と信仰生活、◇フォーラ
ム：1. カトラジ！始めました、2. 筆に祈り
を託して 装丁家桂川 潤さん、◇連載：1. 奉
献生活への招き⑧、2. 一人ひとりが大切にさ
れる社会に向けて⑧、3. キリシタンの生き方
に学ぶ⑧、4. みことばが互いに響き合っ
て―ことばの典礼を生活に生かすために、5. 食卓
からのおもてなし―祈りをこめて⑨

「羊群」

◇ 今月のテーマ： 戦争

1. 特別寄稿：「戦争とフィリピン共和国と私
の歩み」、◇連載：①アルコイリスからの便り
「終戦の月に想うこと」、②イエスのたとえ話
「ぶどう園の労働者のたとえ」③信仰寸言「成
熟への五段階」、④一緒に学ぼう「創世記43―
45章」、⑤8月の祈り、⑥今日のみことば「初代
教会」、⑦羊飼いコラム「愛の共同体を壊そう
とする悪魔の働き

「礼拝と音楽 166号」

◇ 特集： 今 平和をうたう

1. 礼拝と平和がつながれますように、2. 新し
い平和の賛美、3. 讃美歌における「平和」の変
遷、4. イスラームと祈り、5. 平和礼拝素材集、
エッセイ：1. 共に生きる群れをめざして―多様

性と平和、2. 子どもたちと学ぶホロコースト、
◇特別寄稿： 賛美の歌を求めて (3)、
Documenta Gregoriana ex Finlandia—フィンランドで発見されたグレゴリオ聖歌、◇連載：①読書案内、②ルターと讃美歌 (10)、③礼拝とシンボル (5) ④歌おう使おう21、⑤教会音楽ジャーナル、⑥主日礼拝に備えて

9月

「百万人の福音」

◇ 特集：九転び十起き

1. 広岡浅子という生き方、2. キリスト教との出会い、3. ゆかりの人々 浅子と出会ったクリスチャン著名人、4. 広岡浅子の回心に見るキリスト信仰の標準、◇ 旬人彩人：輝く106歳 杉山ノブ、◇ あしあと：編集 長谷総明、◇連載：①マンガ ななさんぼ、②いのちのことばが人生を拓く、③ひきこもり院長のつれづれ日記、④侍クリスチャンのすゝめ、⑤ひかりの道すじ、⑥ふんぷんのこと、九月、⑦聖書メガネで映画を見れば、⑧ブルーグレイの空の下で、⑨この町この教会：日本ホーリネス教団 袖ヶ浦キリスト教会、⑩教会津々浦々：石川県・山口県、広島県、⑪ブルーリボン・レポート37、⑫いのちの砦、⑬マンガ すてきな毎日、⑭マンガ、喫茶ホーリー、⑮コトノハラボセレクション、⑯明日へのピクニック、⑰もぎたてぶどう倶楽部 お便り・BOOK、⑱今月のみことば一句

「信徒の友」

◇ 特集：カルトとは何か

1. 巻頭言、2. キリスト教の視点から見るカルト、3. カルト体験からの証、4. カルト問題相談機関・関連書籍、◇ 特別読物：1. 日本基督教団2015年平和メッセージ、2. 「全国信徒会」開かれる、3. 「原爆孤老」ホーム、4. 『旧約聖書神学用語辞典 響き合う信仰』読書会、◇連載：①祈り、②教会のトピックス、③わが家“わんにゃん!”、④献堂しました、⑤祈りの大地、⑥ひかり&しおん、⑦キリスト教と香りの世界、⑧ 聖なる光と祈りの空間、⑨シネマへの招待『Dear ダニー 君へのうた』、⑩みことばにきく、⑪預言者に聴く、⑫あらすじで読むキリスト教文学 三浦綾子『果

て遠き丘』、⑬私のがん体験記、⑭伝道推進室だより、部落解放センターだより、⑮キリスト教学生寮のいま、⑯被災地からの問い、⑰マンガ キリスト教入門、⑱神に呼ばれて [聖職者編] [信徒編]

「福音と世界」

◇特集：戦後70年の教会と神学 3 —教会の戦争責任と戦後責任、1. 戦後70年と福音派諸教会の戦責告白、2. 罪責を告白する教会となるために、3. せんかた尽くれども希望を失はず、4. 戦後70年の歴史に学ぶ、5. 結成70年のドイツ福音主義教会、◇憲法9条の価値を今こそ—安保関連法案の衆院強行採決に抗議して、◇『荊冠の神学』が依然として私たちに問うもの、一栗林輝夫氏の逝去を悼む、◇連載：①聖書味読9「熱帯夜に臥す」、②私のごすべるくろにくる45 2014、③韓国教会通信11 光復と分断、④カナダ教会通信5 霊的な養いと癒しの場、⑤宣教学・事始め5、⑥レヴィナスの時間論『時間と他者』を読む6、⑦CHRISTIAN ICON キリスト教美術案内6、⑧現代日本の福音(エヴァンゲリオン) 13『新世紀エヴァンゲリオン』、⑨佐藤 優のことばの履歴書18 法的安定性、⑩南島キリスト教史入門11「深化」と「越流」の震源、⑪詩編の思想と信仰127 詩編121篇、⑫表紙画について

「舟の右側」

◇ 特集：「同性愛」と教会 1. 「虹」をめぐる戦い、2. 同性愛と神の裁き、3. 同性愛、どう考え、どう受け止めるか?—五つの側面から 4. 滝元明牧師 天に凱旋、◇ 一押し書評『ただひとりのために立ち止まる』、◇連載：①神様に呼ばれてどこまでも!、②必要なことはただ一つ、③新連載：聖書に見る神の国の福音、④被造物管理の神学シリーズ その11、⑤旧約聖書の誤解・正解・分からない、⑥教会成長ここがポイント、⑦夫婦の癒しと回復を求めて、⑧ジャンル別新聖書解釈入門、⑨月ごとに週ごとに、⑩風知一筆

「HAZAH」

◇ 特集：香港ギャザリング

1. アジアギャザリング、2. 約束を見て進め！3. 揺さぶられる韓国、4. 日本とアジアの和解、5. アジアの時、◇連載：1. 創造と福音、2. 過越し祭（ペサハ）緒論Ⅲ、3. さあ、食べて楽しもう、4. 宣教のために行動を起こそう、5. 本文批評学の中の光と闇⑮、6. 聖書翻訳こぼれ話、7. 特別寄稿—神社仏閣油まき事件と教会への提言、8. 油まき事件から学ぶこと、9. 愛とロマンの地へ、10. 神との全き道を行く代価

「羊群」

◇ 特別寄稿：「構わず愛しなさい」

◇ 連載：1. アルコイリスからの便り、2. イエスのたとえ話、3. 信仰寸言、4. 一緒に学ぼう、5. 今日のみことば、6. 羊飼いコラム



各教団・教派、宣教団体の 機関紙・ニュースから

7月

「教団新報 NO.4823 7/4」

（日本基督教団）

1. 教区総会報告：東北、関東、東中国、東京、奥羽、2. 教育委員会：青年担当者会・教育担当者会・セミナー日程を決定、3. 教師要請制度検討委員会：10年目の教師研修について検討、4. あつまろう 全国信徒会再結成第1回大会：全国信徒会、半世紀ぶり再結成、5. 宣教委員会：伝道協力の実質化のために、6. 第14回アジアキリスト教協議会総会報告

「教団新報 NO.4824 7/25」

（日本基督教団）

1. 教区総会報告：神奈川、総幹事総括、2. 2015年度 新任教師オリエンテーション、3. 教師委員会：16年度オリエンテーション、新会場にて、4. 社会委員会：札幌にてフィールドワーク、5. 予算決算委員会：教団総会会場費必要と判断、6 「障がい」を考える小委員会：16年度全国交流会開催を決定、7 宣教師人事・支援合同委員会：人事・支援、重なる課題を協議、8. 部落開放センター運営委員会：2014年度決算報告を承認、9. 消息、10. 事務局報

「聖公会新聞 NO.719 7/25」

（日本聖公会）

1. 沖縄慰霊の日に戦後70年記念礼拝 北谷諸魂教会で全主教参列、2. 安保法案に対する緊急声明発表、3. 山谷を聖地（サンクチュアリ）に、4. 「命どう宝の」の精神を学ぶ 沖縄週間—沖縄の旅から、5. 聖書の学び合いから 御言葉に聞く、6. 野の花3、7. 各教区だより：横浜、九州、中部、大阪、東京、神戸、東北、北海道、8. 一挙に4聖職者誕生

「キリスト教学校教育 NO. 685 7/15」

(キリスト教学校教育同盟)

1. 第103回定時総会聖隷学園で開催される、2. 第103回定時総会議事録、3. 特別プログラム講演 聖隷創始者たちの生きざまとその精神、4. 東北・北海道地区 第2回新任教師研修会、5. 関東地区教職員後継者養成部会

「世の光 NO. 778」 (日本同盟基督教団)

1. 教会支援部：教会支援教師派遣・報告、2. 宣教研究所：ローザンヌ運動40周年企画 「社会的責任」の先に福音を、3. 総務部：全世界へと広がる「祈りのネットワーク」、4. 教会紹介：クロスロードチャーチ岡山、5. 恵流：塩尻の「塩」でありたいと願いつつ、6. 救いの証し、7. 教団ニュース、◇ 国内宣教 NO. 178、1. 2015 キャラバン伝道への期待、2. 「三重開拓宣教大会～三重がみえてくる～」、◇ 東北宣教プロジェクト NEWS No. 4、「三陸宣教に参加を」、◇ 国外宣教 NO. 461、1. 信徒宣教師派遣の実現を、2. 得勝者課、3. マイワ語聖書翻訳、4. 宣教師近況・祈祷課題

「JHC Revival 801号」

(日本ホーリネス教団)

1. 「視」過去を、今を、未来を、2. ネヘミヤプロジェクトのこれから 世界に仕える教団・学院・教会、3. 宣教を考える、4. 温故知新：東北教区の源流を尋ねて、5. 明日への種まき：東北教区における取り組み、4. ユースジャム2016 全国代表者会議を終えて、5. 宣教局ニュース：①国外宣教「ユースジャム2016まであと一年!」、6. 教育局だより：「説教!再チャレンジ」、7. 積極的平和主義?聖書の問いかけ、8. 追悼 故河野正之牧師を御国に送って、9. 教団本部ニュース

「イムマヌエル教報 NO. 828」

(イムマヌエル総合伝道団)

1. 夏期聖会への期待—聖会は再出発の恵みの機会に、2. KJHA 青年大会(関東聖化交友会) ONE HEART! 一つとなるために!、3. 献堂式 彦根教会、4. 海外トピックス、5. 国内教会局から 信頼関係の土台とは、6. 厚生委員会報告、7. JEA総会報告、8. 追憶 故久芳頭

先生、9. 世界宣教局：カンボジア、ザンビア、台湾、ボリビア、10. 聖宣神学院報、11. 公報・消息

「JCCJtimes NO. 752」

(日本イエス・キリスト教団 時報)

1. ビジョン 2021：「伝道第一の姿勢」とは、2. 協力教会制度：「想定外の祝福」—危機をチャンスに—、3. 教区だより：①東北教区、②関東教区、③信越教区、④京都教区、⑤兵庫教区、⑥中国教区、4. 公報・消息

「アッセンブリー News NO. 718」

(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 教団の動き60、2. 第40回全国聖会ニュース3、3. 紹介 海外伝道部、4. 教団出版事業再開に向けて、5. 教区キャンプ案内、6. 信徒が学ぶギリシャ語 第2回、7. 新・祈りのコラム⑮、8. 教区情報 vol.7 中国教区、

「JECA フォーラム NO. 95」

(日本福音キリスト教会連合)

1. 神奈川県西湘南特集 南関東地区、2. 支援フォーラム～献金の感謝と、さらなる協力のお願ひ、3. News & Prayer

「合同 NO. 375」 (日本キリスト合同教会)

1. 宮古ミニストリーの現状とこれからの展望、2. 新入会員紹介、3. イエスさまとの出会い (141)、4. 5月常任委員会レポート

8月

「教団新報 NO. 4825・6 8/8」

(日本基督教団)

1. 第39回総会期 第3回 常議員会：①会館工事費用負担決定を報告、②「戦後70年祈り」を常議員会決定、③伝道資金制定に伴う補正予算証人、④「『マイノリティ問題と宣教』国際会議」共催を決定、2. 在日韓国朝鮮人連帯特設委員会：「国際会議」協力を確認、3. 伝道委員会：開拓伝道援助教会にて委員会を開催、4. 在日大韓基督教会と日本基督教団との宣教協力委員会：ヘイトスピーチを巡り議論、5. 信仰

職制委員会：「式文試用版」アンケート実施を決定、6. 第71回キリスト教社会事業同盟総会・研修会、7. 消息、8. 事務局報

「世の光 NO. 779」 (日本同盟基督教団)

1. 日本同盟基督教団「教会と国家」に関する戦後70年宣言文—この時代に見張り人として立つ—、2. 救いの証し、3. 献身の証し、4. 宣教研究所：ローザンヌ運動40周年企画 イエスさまの働きへの継承として、5. 教会紹介：①枝川愛の教会、②クリスチャンプレイズチャーチ、6. 宣教区紹介：北陸飛騨宣教区紹介、7. 教団ニュース、◇国外宣教 NO. 462：①国外宣教師の自己形成、②事件発生(モンゴル)、③生徒たちの晴れ舞台(ブラジル)、④宣教師近況・祈祷課題

「イムヌエル教報 NO. 829」

(イムヌエル総合伝道団)

1. 青年たちの夏、そして秋へ—、2. 福音讃美歌協会総会を経て、3. 女性牧師部からのお知らせ、4. 追憶：故伊藤正泰先生、5. JEF 総会報告、6. 海外トピックス、7. 国内教会局から、8. 災害対策委員会から、9. 創立70周年記念企画「継承」、10. 燈台 ほっと・ティータイム、11. 公報、◇広げた翼：世界宣教局、①香港、②ケニア・テヌウェク、③ボリビア、④台湾、⑤ザンビア、◇聖宣神学院報、1. 神学エッセイ：行って弟子としなさい、2. 前期の学びを終えて

「JHC Revival 802号」

(日本ホーリネス教団)

1. 「視」～過去を、今を、未来を～、2. ネヘミヤプロジェクトのこれから、3. 宣教を考える、4. 温故知新：奥羽教区の源流を尋ねて、5. 明日への種まき：奥羽教区、6. 平和特集：戦後70年アジアのホーリネス教会、7. YOUTH JAM. 2016、8. 宣教局ニュース：国外宣教「河瀬愛子宣教師を支える会発足」、9. 東京聖書学院PR、10. 第30回日本福音同盟(JEA)総会報告、11. JEF 徳島大会報告、12. 教団本部ニュース

「JCCJtimes NO. 753」

(日本イエス・キリスト教団 時報)

1. ビジョン2021：未信者を誘える礼拝にしよう、2. 協力教会制度：真の教会間「協力」とは、

3. 中堅教師リトリート、4. 女性教師リトリート、5. 教区だより：①北海道地区、②東北教区、③関東教区、④大阪教区、⑤兵庫教区、⑥中国教区、6. 公報・消息

「アッセンブリー News NO. 719」

(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 教団の動き61、2. 召天 白石享子先生の思いで、3. 紹介 厚生部、4. 中央聖書神学校(CBC)掲示板、5. 特集：私たちの70年問題、6. 第40回全国聖会ニュース4、7. 信徒が学ぶギリシャ語 第3回、8. 献堂レポート、9. 教区情報 Vol. 8：四国教区

「合同 NO. 376」 (日本キリスト合同教会)

1. サムエルコンサート、2. 北信地区伝道集会、3. 小池謝恵姉を偲んで、4. 新入会員紹介、5. イエスさまとの出会い(142)、6. JEA総会レポート

9月

「教団新報 NO. 4827 9/12」

(日本基督教団)

1. SMJ 中高生ディスカバリーキャンプ：震災被災地、宮城・福島の中高生が参加、2. I Love Taiwan Mission 2015：18カ国90名の海外青年が台湾青年と共に、3. 宣教委員会：16年3月開催、宣教方策会議について検討、4. 教団教誨師会研修会・教区代表者会、5. 日韓連合異端似而非対策セミナー報告：日韓共同で統一教会問題に取り組み、6. 救援対策本部会議：「救援活動記録刊行委員会」設置を決定、7. 第6回夏期研修会：説教を主題に活発に意見交換、8. 宣教師からの声(番外編)：愛の教育者 アニー・ダウド、9. 消息、10. 事務局報

「聖公会新聞 NO. 720 9/25」

(日本聖公会)

1. 平和のために祈り、集う 広島・長崎、2. 日本聖公会の受難の関から70年を迎えて、3. 大韓聖公会主教院が応答 日本聖公会主教会メッセージに、4. 安全保障関連法案の撤回・廃案を、5. 女性の思いを分かち合う 第25回聖

公会女性フォーラム、6. 選び取るいのちと平和 沖縄週間プログラム、7. 各教区だより：北海道、東北、大阪、九州、東京、沖縄、神戸、京都、8. 分断と和解 今年も日韓青年セミナー、9. 日比米3教区青年交流プロジェクト 横浜教区

「キリスト教学校教育 NO. 686 9/15」

(キリスト教学校教育同盟)

1. 第59回事務職員夏期学校：①主題講演「期待と信頼」を持って、②特別講義 ゴスペルを叫ぼう、③3日間のまとめ、④夏期学校に参加して、⑤アンケートから、2. 第60回東日本小学校教職員協議会 関東学院小学校で開催される、3. キリスト教教育者物語30

「世の光 NO. 780」 (日本同盟基督教団)

1. 松原湖研修会メインテーマは『青少年宣教』です、2. 宣教研究所：ローザンヌ運動40周年企画 伝道と社会的責任(前編)、3. 信望愛：神を畏れる共同礼拝、4. 救いの証し、5. 献身の証し、6. 教会紹介：岡山グレイス・チャーチ、7. 教会支援部：教会支援教師派遣・報告、8. セクハラ防止相談委員会：セクハラ相談窓口開始のお知らせ、9. 教団ニュース、◇ 国内宣教 NO. 179、1. みことばを宣べ伝えなさい、2. デプテーションにぜひお招きください！、◇ 東北宣教プロジェクト NEWS No. 5、「祈りの答えとしての東北宣教プロジェクト」、◇ 国外宣教 NO. 463：1. 牧会における世界宣教、2. 寥(佐藤)節子さんのこと、3. マイワ語聖書翻訳、4. 宣教師近況・祈祷課題

「イムマヌエル教報 NO. 830」

(イムマヌエル総合伝道団)

1. バックストーンに心燃やされて、2. 厚生委員会からのお知らせ：引退される先生方のセイフティーネットに、3. 厚生委員会からのお願い：モーセに感謝して、4. 「とにキャン」の報告：主からのチャレンジ、5. 教団創立70周年青年大会を振り返り：さまざまな立場から将来への提言、6. 海外トピックス、7. 国内教会局から、8. 読書のひろば：バックストーン著作集、9. 献堂式：安食教会、10. 公報、◇ 広げた翼：世界宣教局、1. ザンビア、2. ボリ

ビア、3. ケニア・テヌウェク、4. フィリピン、◇ 聖宣神学院報：1. 神学エッセー「世紀」の言葉、2. 信徒土曜講座を受講して、3. 私の神学生時代、4. 同窓生の近況、5. 神学院スタッフー恵みの想起、6. 学苑だより

「JHC Revival 803号」

(日本ホーリネス教団)

1. 「内なる人は新しくされる」、2. 「視」～過去を、今を、未来を～、3. ネヘミヤプロジェクトのこれから 世界に仕える教団・学院・教会、4. 宣教を考える：育てながらの宣教、5. 温故知新：信越教区の源流を尋ねて、6. 明日への種まき：信越教区における取り組み、7. 私の戦後70年：伝えたい平和のメッセージ、8. ルール違反の安保法制ー聖書から見て容認できないわけ、9. 安全保障関連法案強行採決に抗議する声明、10. 学院から、11. 奉仕局だより、12. 教育局だより、13. 北から南から

「JCC Jtimes NO. 754」

(日本イエス・キリスト教団 時報)

1. 隣人に愛をもって仕える自由、2. ビジョン2021：(2) 未信者に証しできる信徒になろう、3. 協力教会制度、4. 教職者宣教コース、5. 教区だより：①信越教区、②京都教区、③中国教区、④関東教区、⑤兵庫教区、6. 公報・消息

「アッセンブリー News NO. 717」

(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 私は一人なのか、2. 教団の動き (62)、3. ICIの使徒 仁司路子先生引退、4. 特集：震災と防災、5. 特集：全国聖会40回記念、6. 新刊販売!!～全国聖会にて～、7. 中央聖書神学校(CBC)掲示板、8. 教区聖会案内、9. 献堂レポート、10. 教区情報 Vol.9：九州教区

「連合通信 NO. 218」

(日本バプテスト教会連合)

1. <主の恵みの年>を生きる、2. 連合の歩み(2015年6月～9月)：①連合五十周年関連事業、②教職者関係、③宣教部関係、④総務・財務関係、⑤教育部関係、⑥宣教師関係、3. 祝おう！主の恵みの年として④-1 連合50周年記

念：対談 佐々木望師・藤藪庸一師、4. 祝おう！主の恵みの年として④-2 米国引退宣教師への感謝の訪問Ⅱ、5. 新任教職紹介、6. 連合協力宣教師便り、7. 連合宣教師候補便り、8. 連合神学生便り、9. 教会ニュース

キリスト教大学・神学校のニュースから

7月

「新潟聖書学院 聖ヶ丘通信 第90号」

1. 「主のために最高のものを」、2. 2015年度新入生紹介、3. 教会訪問「六日町キリスト教会での礼拝と按手式」、4. 近況報告—口永良部島から、5. 院長室より、6. 学窓ニュース

「聖契神学校ニュース NO. 124」

1. 目覚めてとどまる弟子に、2. 工事の槌音響くキャンパスから、3. 新入生の証し：基礎科9名、聴講生9名、4. 学生会だより、5. スクールレポート（入学生：正規生9名、聴講生9名）、6. 神学校祈祷課題

8月

9月

「神戸改革派神学校校報 NO. 79」

1. 「神学を教えること—神への問いと祈りの共同作業—」、2. 卒業生挨拶、3. 入学生挨拶、4. 編入生挨拶、5. 神学校生活(十五) 神学諸科(IV)実践神学(2)、6. リトリート：「創造主は宣教の主 最も小さき者の宣教」、7. 2015年神学校行事、8. 「秋の神学校公開講座案内」、9. 新刊案内

「お茶の水聖書学院 NEWS 第43号」

1. 「全てを導かれる主とともに」、2. 特別講座レポート：『恵みの双方向性』『ホスピスの原点を考える』柏木哲夫先生、3. 学窓トピックス、4. 「OCC お茶の水聖書学院後援会・同窓会」発足のお知らせ

各学術雑誌の記事から

「宣教学ジャーナル 第9号」

(日本宣教学会・2015.7) 伝道論の現在—

『いのちに向かって共に』を

- ◇ 論文：1. 「最近の福音宣教に対する声明—比較と分析」、2. 「WCCにおける宣教・参考に」、3. 「キリストと兄弟を愛することを教えてくれた友人—ジョヴァンニ・リヴァ (1942～2012年)」、4. 「ノン・クリスチャンの神義論的疑問に、いかに応答すべきか?」、5. 「米国日本におけるポストモダン時代の幼児教育・メソヂスト監督教会における東アジア宣教に関する研究—M・C・ハリスとW・R・ランバスの関わりを中心に」、◇故今橋 郎氏追悼文、◇書評、◇世界宣教学ニュース

「福音と社会 紀要 第30号」

(農村伝道神学校・2015.8)

- [論文] 1. 『ルツ記』ラシ註・イブンエズラ註全訳—中世ユダヤの聖書注釈を読む—、2. 原初的福音伝承とマルコ福音書、3. 「神論」の系譜—ある視点からの素描—、4. 現代神学生の課題、5. 代苦か共苦か—イザヤ書53章「苦難の僕の歌」を読み直す、6. 書評：社会運動的宣教の解明と「承認をめぐる闘争」という思考モデル

「キリスト教文化研究所年報 第37巻」

(ノートルダム清心女子大学

キリスト教文化研究所・2015.7)

- ◇ 論文：1. ルルド研究序説 (1) —祈りの聖地が生み出す共同性、
◇ 翻訳と解説：キリスト教的世界観と人智学的精神科学—ルドルフ・シュタイナーの講演集を読む—第一話「死から再誕生までの期間」
◇ 講演：1. 神を消し去ってしまうもの—神の蝕、2. イエスの生きざまにみる神とのかかわり



「カトリック研究 第84号」

(上智大学神学会・2015.8)

◇論文：1. 人間、そして諸器官—旧約聖書における「手」「目」「耳」と人間、2. マタイ福音書における「毒麦の譬」の編集史的研究、3.

「無名のキリスト者」？、4. 教義の頌榮的次元 (Doxological Dimension) についての一考察—古代ギリシア教父の頌榮的思惟の現代的意義に焦点を当てて、5. アンセルムスの祈り—「聖母マリアへの祈り」と祈りの円環構造—

◇書評：1. ハンス・キュング著『人間性の体験—回想録』、2. K・リーゼンフーバー著『近代哲学の根本問題』、3. わが国における最近のトマス哲学研究の動向に関して、4. ローズマリーラドフォード・リューサーの教父学研究の意義に関して

「聖書と神学 NO.27」

(日本聖書神学キリスト教研究所 2015.7)

◇特集：「キリスト教と偏見」

[特集論文] 1. 旧新約聖書における人間のルーツの課題、2. イエス時代の社会の偏見とイエス、3. 風評被害と宗教者であること、4. 日本における人身御供伝説から見た「イサクの奉献」(試論)

[研究論文] 1. ディダスカリアにおけるやもめ、◇書評：『神の後にI、II』、ぷねうま舎、2015年「マーク・C・ライラー著」

「新約学研究 第43号」

(日本新約学会・2015.7)

◇論文：1. マタイによる福音書における「異邦人」、2. 「人は『法の業』からは義とされない」— *ἐάνμη* 節はどのように結びつくか (ガラ 2:16a) —、3. 排除か？共棲か？—II テサロニケ書の執筆意図をめぐって—、

「神学研究 第62号」

(関西学院大学神学研究会・2015.3)

◇論文：1. 「いつくしみとあわれみの神」—ヨナ書におけるヤハウエの描かれ方—、2. Selbstbezüglichkeit und Ich-Staudort in Röm 7,7-25a、3. 「キュプリアヌスの疫病」考—古代キリスト教におけるフィランソピア論の

ための予備的考察—、4. 内村鑑三における二元論的思想の再考、5. オットー・ドライアーとアドルフ・フォン・ハルナック—ドイツ「使徒信条論争」の一断面—、6. 地域における薬物依存症から回復を望む HIV 陽性者に対する牧会ケア—個人の魂の救いと社会正義の視点から—、7. 第10回 WCC 総会に提示された二つの合意文書—エキュメニカルな教会論と宣教論—、8. YMCA “Paris Basis” の日本における宣教論的意味、9. 「善い話」をやめる

◇研究ノート：1. パリハカー—非暴力・不服従抵抗の地—、2. 古代地中海世界の追放儀礼に関する一次文献の分類と解説

「ウェスレー・メソジスト研究 15号」

(日本ウェスレー・メソジスト学会・

2015.3)

◇論文：1. アングリカニズムとメソディズムの接点—メソジスト教会と聖公会の国際対話から—、2. ウェスレーのプラクティカル・ディヴィニティと英国教会—恵みの手段を手がかりとして—、3. 聖書は女性のマグナ・カルタ—ジェニー・F・ウィリングと19世紀メソジスト女性の活動主義の源—、4. ジョン・ウェスレーと近年メソジスト教会の国家と平和について、5. ウェスレーの経済神学と財観の発展—初期から中期の社会的活動の変遷に着目して—、◇報告：明治維新から第一次世界大戦までの日本メソジスト教会の苦闘

「キリスト教史学 第69集」

(キリスト教史学会・2015.7)

◇特集：(第65回キリスト教史学会大会)

1. 公開講演「初期同志社と宣教師」、2. シンポジウム「戦時期宗教団体法下におけるキリスト教」

◇論文：1. 戦後台湾キリスト教界における超教派運動の展開と頓挫—分水嶺としての「国是声明」と歴史観の相剋—、2. 宗教団体法及び改正治安維持法の下での日本セブンスデー・アドベンチスト教団の弾圧、3. グアテマラにおけるラス・カサスの平和的布教観 (1536-1538年)—布教方針と『布教論』原則との関連性の考察を中心に—、4. 「ユダヤ人」と呼ばれたキリスト教徒たち—4世紀にお

ける「新ユダヤ人」と「半ユダヤ人」という2つの呼称を巡って

◇研究ノート：1. 松山高吉と植村正久の関係形成過程とその意味、2. 小崎成章のキリスト教・日本宗教論、3. 大韓聖公会初代主教コーフの宣教—日本人への活動を中心に、

◇書評：1. 倉田明子著『中国近代開港場とキリスト教—洪仁玕がみた「洋」社会』、2 桐藤薫著『天主教の原像—明末清初期中国天主教史研究』

「宗教研究 第89巻 第382号」第1輯 (日本宗教学会・2015. 6)

◇ 論文：1. W. リップマンの『公共哲学』とP. ティリヒの『組織神学』をつなぐ回路、
2. R. オットーにおける「宗教的アプリオリ」理解、3. 切断に抗して

「宗教研究 第89巻 第383号」第2輯 (日本宗教学会・2015. 9)

◇ 論文：[特集：国家と宗教]

1. 天皇制国家と余白、2. 植民地朝鮮における宗教政策と日朝仏教、3. 現代イスラームにおける国家と宗教、4. アッシリアにおける国家と神殿、5. イスラームはいつ、いかにしてフランスの宗教になったのか、6. アメリカにおける国家と宗教

「キリスト教文化研究所 紀要 33」 (上智大学キリスト教文化研究所・2015. 4)

1. 道徳と情愛と本性—柳宗悦と平和の詩学、
2. 善の心を導く不害、3. アウンサンスーチーの非暴力主義—ガンディーの精神を二一世紀に引き継ぐ—、4. 宗教間対話を可能にする理論を求めて、◇ 研究ノート：いのちを育む

あとがき

第6号の「日本宣教ニュース」をお届けできることを感謝いたします。

今回のJMRレポートは、第4回目となる「教会と地域福祉」フォーラム21の内容を掲載いたしました。折しも開催日の未明に、「安保法案」が参議院で成立しました。

開催の挨拶で稲垣師もそのことに触れ、「ヨーロッパがシリア難民を受け入れているのに、日本は受け入れようとはしない。何故そうなのか。この国は命を重視しない国。そのような国がどのような国際貢献をしようとしているのか。キリスト教会の社会的な責任は重い」と述べられました。

多くの学者や法律家らが違憲とする指摘を無視し、憲法解釈を都合よく変え、立憲主義や民主主義を蔑ろして、「安保法案」を多数の力によって成立させた安倍政権でした。

キリスト教会は、そのような政治のあり方に対する社会的責任を自覚するべき時です。その一方で、これを反面教師としなければならないのではないのでしょうか。立憲主義を大切にす教会の中においては、みことばや教憲・教規を自分たちに都合よく解釈し、権威主義的・独裁主義的な教会政治を行うことがないようにしなければなりません。

(初穂)



日本宣教リサーチ調査報告会

教会インフォメーションサービス (CIS) の働きを引き継ぎ、日本宣教の基礎的研究を行うことになった日本宣教リサーチ (JMR) は、発足から 1 周年を迎えることができました。この間、皆様からいただいたご支援を心から感謝いたします。

つきましては、この度、皆様のご支援に感謝して、下記のような調査報告会を開催することといたしました。皆様に、初年度の調査活動の成果をご報告すると共に、今後日本宣教リサーチが、日本宣教のパラダイム転換に少しでも寄与していけるように、また、さらにより良い活動が展開できるように、皆様から今後の活動に対するご意見や、ご要望等をお聞きしたいと願っていますので、是非ご参加くださるよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、初年度の調査活動の成果としては、次の 2 点をご報告させていただきます。

1. 2013 年度全国キリスト教会の教勢
2. 来日宣教師の実態調査



発題者：柴田初男

国際宣教センター日本宣教リサーチ専門委員

発題者：花蘭征夫

国際宣教センター日本宣教リサーチ専門委員



2015 年 **11/2** (月) 13:00 - 15:30

会場：東京基督教大学国際宣教センター

お問合せ・お申込み

資料代	1,000 円
申込内容	①氏名 ②電話 ③E-mail ④所属教団・教会名
申込み先	E-mail : fcc@tci.ac.jp FAX:0476-31-5521
申込締切	10月21日(水)
連絡先	0476-31-5522



申込み者には、事前に、2015 年 4 月に発行された「年次レポート」を送付いたします。レポートを読んで、報告会におのぞみください。

日本宣教リサーチ ご支援のお願い

教会インフォメーションサービス（CIS）の働きを引き継ぎ、日本宣教の基礎的研究を行うことになった日本宣教リサーチ（JMR）は、発足から1周年を迎えることができました。CISの支援者が継続してJMRをご支援下さったこと、新しい支援者も加えられたことを感謝いたします。ところが、今年度の収入予算達成率は9月末現在**20%未満**です。

この20年、グローバル化の中で在日外国人教会の増加、在外信徒や求道者の帰国、韓国系教会・単立・インターナショナル教会の増加、聖霊派の影響、都市と地方の格差、教会の統廃合など、日本の教会の様相は大きく変化しました。その中で、教勢データ等客観的なデータに基づく地域の宣教協力や新たな宣教方針、或いは地域に根ざす教会の形成や文化脈化等の理念の検討と実践が求められている中、JMRが少しでも貢献できればと願っています。

2015年度は新たに、東日本大震災被災地における「震災と信仰」調査プロジェクトを実施しています。これは、震災後の被災地における支援と宣教活動を記録すると共に、これからの日本宣教のあり方を被災地の取り組みから学ぼうとするものです。どうかこれからの日本宣教リサーチの働きにご期待くださり、**更なるご支援を賜りますよう、よろしくお願ひいたします。**

【賛助会員】「日本宣教リサーチ」の活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

- (1) 特別賛助会員：趣旨に賛同し、支援して下さる教団・教派、宣教団体等
 - ・一口 30,000 円（何口でも）
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催をご案内します。
 - ・毎年2～4回「日本宣教ニュース」を提供します。
 - ・毎年1回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート（詳細篇）を提供します。
- (2) 一般賛助会員：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等
 - ・一口 2,000 円（何口でも）
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催をご案内します。
 - ・毎年2～4回「日本宣教ニュース」を提供します。
 - ・毎年1回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート（概要編）を提供します

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

TCUへの寄付金（献金）は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金（献金）額の約50%となります。

（詳しくは、☎0476-46-1131「TCI募金係」までお尋ねください）。

郵便振替口座：00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

* お振込みの際には、**本学発行の振替用紙に「日本宣教リサーチ 指定」と必ずご記入ください。**（振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします。）



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5

学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内

TEL：0476-31-5522 FAX：0476-31-5521 E-mail：jmr@tci.ac.jp

<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一（東京基督教大学大学院神学研究科委員長）

日本宣教リサーチ専門委員 柴田 初男、花蘭 征夫